
ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

スイショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト～勇者達の物語

【NNコード】

N8664Y

【作者名】

スイショウ

【あらすじ】

依頼を終えて暇を持て余していた冒険者アウダー。彼の元に勇者を名乗る一行からとある依頼が舞い込んだ。怪物島と呼ばれるデルムリン島への案内を頼みたいというものだ。軽い気持ちで引き受けたこの依頼がアウダーの、彼の周囲の運命を大きく変えて行く。

arcadia様にて投稿している「勇者達の物語」の修正版です。arcadia様での投稿分は削除いたします。

プロローグ～始まりの物語～（前書き）

この物語は「ドラゴンクエスト ダイの大冒険」を原案として、作者のオリジナルキャラクター、独自解釈を加えて再構成しています。

そのため、ストーリー展開は原作に沿った部分もあれば、大幅に変化する部分もあります。

このために、「原作登場人物」の中には、設定・役回りが大幅に変化して登場するキャラクターもあります。

誤字脱字などありましたら、遠慮なくご指摘いただると幸いです。
ご意見、ご感想もお待ちしております。

プロローグ～始まりの物語～

天界、魔界、そして地上界

天地創造をなした神々は、次いで多くの種族を世界へと産み落とす。

人間、竜、魔族、そして多種多様な怪物達。モンスター

人間と竜と魔族は地上を治め、怪物達は種に応じてあらゆる場所で生息をしていた。

神々の庇護の元、大きな争いも無く平和に治められていた世界。しかし、長きにわたる平和も徐々に陰りを見せ始める。

生物として、他の種族とは比較にならない力と知識を持った竜の傲慢。

多種多様な能力と長い寿命、強大な魔力という力を持つ魔族の野心。

最も脆弱であるが故に、知恵を、道具を、武具を、魔法を用い、求める事を続けてきた人間。

長い時は、この三種族の間に生まれた僅かな軋みを巨大な歪みへと変化させ やがて地上は三種族の覇権をめぐる争いの中に。

「……それで、世界はどうなったの？」

「この争いを怒り悲しんだ神様ですね、竜は知を、魔族は光を、人間はそれまで蓄えていたモノ全てを取り上げられてしまったんですよ」

怖いですねえ。そう続けながら、男は幼い兄妹の目線に合わせる
ようにしゃがみ込んだ。

黒縁の眼鏡を外し、幼子を見つめる彼の眼差しは穏やかである。
泣き止みはしたものの、未だぐずついている少女と、どこかばつ
の悪そうな様子でそっぽを向いている少年。

少女の左手は少年の服の裾を掴み、その右手にはりんごが一つ。
兄を見て、りんごを見て。そうして少女はおずおずと手にしたり
ンゴを男へと差し出した。

「お互いやがお互いを思いやり、分かち合ひ、理解し合ひをしてい
れば。きっと素敵な世界になっていたんでしょうねえ」

男は懐からナイフを取り出すと、少女の手から渡されたそのりん
ごを軽く放り上げ

「ちよああああつー

奇声を上げた。

突如上がったその声に何事かと兄妹の気が逸れた一瞬の出来事で
あつた。

「二人とも、手を出して下せー」

差し出された兄妹の掌にトトトッ、と何かが落ちて来る。それは
綺麗に三つずつ六等分に切り揃えられたりんごであった。

ただ等分しただけではなく、皮を耳に見立てたウサギ仕様である。
男の技量と妙な凝り様がうかがえる。

「三つと三つ、半分個です」

わあつと表情をほこらばせながら去つて行く兄妹を、男は手を振り笑顔で見送つた。

眼鏡を掛け直し、良い仕事をしましたねえ、と内心漫りながらしばらくなつやつて眺めていると

「おおっ、それはナイスですねえ～。グッジョブですよ～ポップ」

その聞きなれた声に男アバンが振り返る。大きく手を振りながらこちらへと駆け寄つて来るのはトレードマークのバンダナを巻いた黒髪の少年　ポップの姿。

数少ない「ハーフ族」の一人であり、元々の不魔術性を自利している少年である。

「ゼエゼエ……な、なんすスか……、その、グツ、じよぶつて……」

「グッドジョブ、つまりは良い仕事といつ事ですよ」

よほど急いでいたのかゼエゼエと荒い息をつく弟子の姿に、明日からの授業は体力向上をメインにしようと誓うアバン。

(とはいえ、まあ……無理でしょうねえ……)

訓練メニュー其の一で音を上げるポップの姿を想像し、その誓いを直ぐに撤回する。

同年代の少年達に比べてもポップの魔法使いとしての資質が十分にある事はアバン自身認めてはいる。

弟子となつて数ヶ月ではあるが、既に魔法使いとしての初級の呪文をほぼ全て修めている事がそれを証明していた。

しかし、どうにもこうにも根性が無いといふか堪え性が無いというか注意力散漫といふか。

その成長を褒めた事が災いしたのか、生来の性格的な面か、そこからなかなか次のステップへと進もうとはしない。

何かと理由を付けては厳しくなる修行を避けようとするのだ。

ガツンと厳しく当たればよいのであろうが、ポップ自身が魔法使いとして成長するという事にそこまで必死になつてゐる訳でもなく、アバンにもポップを急いで成長させる様な理由は無い。

(結局は本人のやる気の問題ですしねえ)

「ハア……ハア……、と、とにかくですね、パプニカへの船は出せる。……でも、もう直ぐに出港するって……ゼ」

「とりあえずですね、深呼吸して落ち着きなさいポップ。船の件は分りました。ああ、彼はどうすると言つっていましたか？」

「……フウ……ハア……。ああ、あいつなら『パプニカには鬼がいるから寄りたくない』って言つてロモス行きの船に乗つてしまつたよ」

あいつとは、旅の道中で出会つたとある青年の事である。師であるアバンと意氣投合したのか、一月ほどであつたが共に旅をしていた人物である。

腕が立つのは認めるが男としてあいつを認めるわけにはいかない、乗り越えるべき壁だというのがポップの認識であつた。

鼻の下が伸びてゐる辺り、その燃やしている対抗心は口クな事ではなさそうであつたが。

「ふむ。ならば私達も急ぎましょうか」

「うへへへへと怪しく笑いだす弟子の姿を見るべく見ない様にして
そう言つと、アバンはポップの身体をひょいと小脇に抱えてみせ
る。

「はへ？」

「時間は有限ですかね。タイムマイズマネー、急ぎますよ~」

何を、とポップが抗議の声を上げる間もなく、アバンは凄まじい速さで駆け出した。

砂塵を巻き上げて爆走するアバン。ポップの抗議は右から左。

砂塵によつて奪われた視界、時折り頬を掠める砂利や道行く人の叫び声。

何より恐ろしいのは地面と水平になつてゐる自分の身体に揺れや振動を感じないという事。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬしんでしまう~~~~ツツー！」

涙と鼻水を撒き散らすその姿を砂塵が覆い隠してくれていた事は、
ポップにとってある意味幸運であった。

「何やつてんだあの二人

桟橋から口モス行きの船に乗り込もうとしていた件の青年は、目の前を駆け抜けた砂塵を呆れたように見つめていた。

サガミはハニカム行きの船が待つ桟橋を通り過ぎている

「パブニカに行くんじやなかつたのか？」
いや、気付いてないのか

伝えるべきかと思案しみつとして

「おい、兄ちゃんよ、乗るなら早く乗ってくれ！」

「ん？ ああ、悪い。直ぐに乗るよ」

船員の少しつらついた声に、まあいいかと二人の事は気にしない事にした。

地上界の中心に位置するギルドメイン大陸。

地上最大の大陸であるその地には、貿易大国であるベンガーナ王国、世界最強と称される騎士団を擁するカール王国、城砦王国と呼ばれるリングガイア王国など、世界有数の大国が存在している。まさしく世界の中心たる大陸である。

そのギルドメイン大陸南端の半島に、アルキード王国といつ国が存在していた。

国力という点においては先の三国に劣るもの、他の諸外国と比較すれば、十分に大国と呼ばれるだけの力を持った国家である。

だが、それも全ては過去の話。

甲板に立つた青年は、手すりにもたれかかりながらその視線をある方向へと向けた。

今、この世界にアルキードといつ名の国は存在していない。

時は十数年遡る。

魔王ハドラーと名乗った魔族が、闇の軍勢を率いて地上世界の征服を掲げて全世界に対し宣戦を布告。

地上界南東に位置するホルキア大陸に自らの居城である地底魔城を構え、宣戦と同時に地上侵攻作戦を開始した。

エルフやドワーフ、ホジットや土着の魔物など、聖邪善悪を問わず地上に生きる者全てを否応なく巻き込みながら、その戦火は加速度的に広がりを見せる。

『国境沿いの山村に魔王軍の襲撃あり』

各国がそうであるように、ここアルキード王国でも日に日に勢いを増す魔王軍への対応に追われ、城内は慢性的な人手不足に陥って

いた。

この日、兵からの報告を受けて対応に向かったのは既に一線を退き今では王の相談役として城に招かれていた老魔法使いブライ。彼が動かせる僅かばかりの手勢を率いてようやくその場所へと到着した時、全ては焼け落ち灰と化した後であった。

「……生存者の存在は絶望的、か

立ち上る煙、灰の中でくすぶる炎。直前まで村であつた廃墟を眺めながらブライが苦々しくもそう呟いた時、ひどく慌てた様子の兵士から思わず報告に入る。

「ブライ様！ 子供です！ 民家の地下室から生き延びた子供が！」

「な、なんじやと…？」

魔王軍との戦いの中、多くの人々が大切な何かを奪われていたこの時代。今また家族を、友人を、思い出の全てを奪われた存在が生まれ続けている。

兵士が連れてきたのは、灰に塗れた子供であった。まるで感情を失くしたかのように表情を固ませた幼い少年。

「……立ち向かつたのでしきうな。扉の前にその子の両親と思わ

」

「 言わざともよい。して、この少年の他には？」

」

絶望視していた生存者の存在は希望だ。ならば他にもと一縷の望みをかけて問うたブライであったが

「いえ……恐いへま……」

「やうか

いつむき答える兵士の言葉に、老いた今の自分の無力を痛感する。

平和の中、老いを受け入れ自らの力を高める事よりも政の道を選んだ。その事を間違っていたとは思わない。

思わないが、それでも、あることはと。そう思ってしまったのは己の未熟故か。

「まあらなんものじやな

そう呟くと、ブライは無言のまま立ち去っている少年を見た。少年が何を思い故郷を、滅ぼされた村を見つめているのかはブライにはわからない。

珍しい光景ではない。

少年の見つめる光景は珍しいものではない。

魔王ある限り、世界では今までこれと同じ光景が、悲劇が繰り返されている。

ひとつして命があるだけでも少年は幸運であったと言えよ。

「じゃが、生きてさえいれば、で済ませるわけにもいかんな

少年の瞳に、怒りや悲しみよりも遙かに大きな憎悪の色を感じ取ったブライは、せめてその道を誤らぬようと、静かに少年の硬く握られた手を取った。

そして数年後。

ブライに引き取られてからの少年は恵まれていたと言える。

新しい家族が、新しい友がいる。

年相応の明るさと活発さを取り戻した少年は、ブライに師事をして魔法使いとなるべく修行を始めていた。

「爺さん以上の魔法使いになる」

照れ臭そうにそう言った少年であったが、ブライは少年が自分に隠れて独自に体術や剣術の修行も行っている事に気付いていた。未だ消えぬ魔王への憎悪が故に、少年が力を求めている事を知っていた。

強くなる事に異論はない。だからといって魔法も体術も幼い子供が片手間で習得できるような容易なものではない。

そこでブライは少年が肉体的な鍛錬に耐えられる身体に成長するまでは知識の習得を優先させる事にした。

幸いにもブライの知人にはその方面に長ける者がいる。古い友人の住むテラン王国へと向かわせる事とした。

テラン王国 ギルドメイン大陸にある、森と湖の国。

徹底した平和主義。時代の流れに逆らうかのように自然主義の思想を掲げ、そして衰退していった。

今では人口僅か五十人程となってしまったもはや名ばかりの小国である。

竜の神という諸国とは異なった信仰を持ち、名産になる物も無ければ、他國の人間があえて観光に訪れるような名所も無い。

定期的に訪れる商人以外は、外から来る者など滅多にいない。

まるで隠れ里のような雰囲気を持つた寂れ行く静かな国。それが
テラン王国であった。

しかし、テラン国王の知識と彼の蔵書は、この世界に並ぶものは
ないとされている。

変わり映えなく繰り返される穏やかな日々。それは戦う力を求める少年にとっては苦痛の日々であつたが、それを打ち破つてまで無茶をする事もできなかつた。

少年を迎えた祖母的な存在と妹分の圧力に屈したとも言ひ。しかし、その変わり無き日々もテラン王より書庫の閲覧を許された日から一変する。

智に魅せられたのだ。

少年は日々の多くを書庫の中で過ごすようになった。

ほんの暇つぶしのつもりが、いつしかそれが目的となり。

食事も睡眠時間も滅茶苦茶になつていると、友人からの報を聞き、別の方向へ無茶を始めた息子にどうしたものかと頭を悩ませたブライアつたが、その心配は杞憂に終わる事となる。

それは、ある一つの報が全世界を駆け巡ったためであつた。

勇者、魔王ハドラーを討つ。

少年の運命を変えた、七年にも及んだ戦乱の終結。

失われた復讐の機会、テランで得た新たな家族とも呼べる存在、月日の流れ、それらの全てが少年をえていった。

成長した少年は、テラン王よりの推薦状を得て何を思つたのか僧侶となる修行を積むべくホルキア大陸にあるパプニカ王国へ旅立と

うとしていた。

戦乱後、魔王の支配下にあつた多くの魔物が、邪悪な呪縛を解かれて人前から姿を消したとはいえ、元々地上に生息していた魔物までもが姿を消したわけではない。

魔王の脅威は失われても、生来の凶暴さを持つ魔物は人々の脅威として存在している。

故に魔王の存在が無くとも力を得る事は無駄にはならない。

少年からそれを聞かされた時、祖母ともいえるナバラはその事に首を傾げ、まだ幼い妹分のメルルは良く分つていないのかナバラの真似をして首を傾げていた。

「まあ、こんな時代だ。強くなつて損は無いだろうが……。魔法使いから僧侶、そしてパプニカ。アンタ賢者にでもなろうつてのかい？」

「賢者なんて大層なものになる気は無いし、なれないよ。ただ、さ。便利でしょ？」

「どちらも中途半端にならなきやいいんだけどね。……アンタの人間だ、好きにやりな」

そうしてパプニカへの旅立ちを翌日に控えたある日の早朝。

復讐という目的を失つたとしても、習慣と化した鍛錬は早々止められるものではなく。

テランの森、その奥深くで田課の鍛錬を終えた少年がいつものよう木の実や山菜を探つて家へと帰ろうとしたその時であった。

「ん？」

背後に感じる気配に少年はその足を止めた。手に持った籠をそっと置くと、いつでも呪文を放てるように精神を集中させて油断なく振り向く。

「何者だ」

ただでさえ人の少ないテランである。知人の気配ぐらいは分るし、用があるなら向こうから声をかけて来るだろ？

「……出て来い。警告は一度まだだ。三度もするつもりはない」

果たして、木々の間から一人の男女がゆっくりと姿を現した。

「や」で止まれ。おかしな動きは見せるな

鎧を纏いその背に竜を模した剣を差した男と、その男に肩を支えられ目深なフードを被つた女性であった。

男は背の剣に手を伸ばそうとしたが、隣の女性がその手に触れて何事かを呟くとその緊張を僅かに緩める。

互いに身を寄せ合つたその姿に、少年の脳裏にふと今は亡き両親の姿が思い浮かぶ。

途端に緊張が失せる。拍子抜けした、と言つてもいいのかもしれない。

「……向ひつに空き家がある。とりあえず、休むぐらには出来る」

構えを解き、そう言って地面に置いた籠を手に取った少年は、二人に背を向けて森の奥へと向かい歩きだした。

その行動眉をひそめた男だったが、傍らの女性が額ぐのを見ると、剣に伸ばしたその手を戻し、女性と寄り添いながら少年の後に続き森の奥へと進んで行つた。

互いに無言で歩く事しばらく。

そうして進んだ先。少し開けた森の中には確かに一軒の小さな小屋があつた。

「……すまない」

ここに至つてようやく警戒と緊張を解いたのか。

男の感謝の言葉に少年はひらひらと手を振る事で答えると、扉を開いて一人を小屋の中へと招き入れた。

相手が“ただの道に迷つた旅人”であれば、家族の待つ家に連れて行くところであつたが、少年が一人をここへと案内したのは理由がある。

疲労の所為か少年の記憶にある姿よりもやつれて見えたが、女性の姿がある人物に似ていたためだ。

直接言葉を交わした事はないが、ブライに連れられた先で何度も目とした事がある。

本人かどうかは分らないが、何にせよ訳有りであろう事は見てとれた。

明日にはパプニカへ、といっここのタイミングで厄介事には関わりたく無かつたというのもある。

ここはさ、一年以上前か。ベンガーナやアルキードでの暮らしが憧れて出て行った人の家。まあ、家というより小屋だけど

簡素なベッドであつたが、放浪の身であつた自分達には十分。愛する妻を休ませると、緊張に満ちた長旅の疲れが一気に襲い掛かつたのか。

男は椅子に深く腰掛けると、何をするでもなく、ただ呆然と天井を見詰めていた。

戦うために生まれた男にとって、たかが追手如き何人向かつてこうが物の数では無かつたが“何かを守りながら”という行為がこれまでに自身に疲労を強いていたとは思いもしなかつた。

その事実が歯がゆくもあつたが、不思議と悪い氣はしなかつた。

好きに使ってくれって言つてたからさ、別にここに住んでも文句は言われない

そうして暫く。

自分が眠つていた事に気付いた彼は、慌てて立ち上がりと急ぎ辺りを見回した。

追手がかかる可能性が常にある以上、迂闊に気を許すわけにはいかなかつたのだ。

周囲の気配を探り、ベッドの上で穏やかに寝息を立てる妻の姿を見て落ち着きを取り戻すと、「ああ、そうか」と呟き再び椅子に腰を下ろした。

まどろみかける意識の中で、彼は先程出合つた少年の事を思い出していた。

おれも時々使つていたからね。シーツを置いていたのは偶々だつたんだけど

脇にあるテーブルを見れば、そこには中身の入つた籠。干し肉や干物などの食料、薬草らしき医療品が置かれていた。

ここを出て少し行くと川がある。北に行くとテランだ。何も無いトコだけど人手位はある。まあ、爺ちゃん婆ちゃんばかりだけどな

いくら疲れがあつたとはいえ、人が訪れていた事に気付けなかつたという事実は、戦場に生きた彼にとつて看過出来る事ではなかつたが。

おれは明日にもこの国を離れる。パプニカに行くんだ。僧侶になるつて言つたら婆さんには首を傾げられた

多分もう会う事もないと思つから、気にしなくてもいい。お互い名乗らなくてもいいか

そう言つて出て行つたはずの少年の心遣いに、思わず笑みを浮かべてしまつ。

結局、そのまま流されるようにお互に名乗ることも無かつたが、縁があればまた会うことがあるのでどうつか。

静かに眠る妻の元へ向かつた彼は、愛おしげにその頬に触れると、表情を穏やかなものに変えて呟いた。

「ここから始めよう、ソアラ。やがて生まれる子と共に、この地で穏やかに暮らそう」

少年がパプニカ王国へと赴き一年程が過ぎようとした頃、ナバラから一通の手紙が届いた。

それは、旅先の少年の身を案ずる当たり障りの無い内容だったが、

ナバラはその道では高名な占い師である。

そんな彼女がこの一年出した事の無い手紙を出した。

ブライとも暫く会つていなかつた事を思い出し、これも良い機会かと、少年はパプニカ王の許しを得て故郷への帰路に就いた。

本来はアルキード王国への直行使に乗りたかったのだが、渡航規制が発せられたとの事で、隣国のベンガーナ行きの便に乗り少し遠回りする事になった。

ベンガーナ王国はアルキード王国と同じ半島の北側に位置する国であり、ナバラの待つテラン王国の隣国でもある。

ブライかナバラ、どちらから向かうかとの考えが纏まらぬまま、ベンガーナの港に着いた少年は、そこで気になる話を耳にする。

魔物に王女を奪われたアルキード王が見事魔物を捕え、公開処刑を行う

少年の脳裏に浮かぶのは、あの森で出会つた一人の姿。

馬鹿な、と少年は思つた。

互いに寄り添う二人の姿は、一年経つた今でもはつきりと思い出せる。

間違いであれど、少年はアルキード王国へと急いだ。

今更少年が行つたところで何ができるとも思えないが、ブライであれば、王の相談役でもあつたブライであればきっと何とかしてくれる。

それは、一瞬の出来事であつた。

駆ける少年の視界の先に、よつやくアルキードの城門が見えたその時

眩い閃光が視界を焼く。

轟音が鼓膜を破る。

爆風が少年の身を包み込み、その身体を遙か上空へと吹き飛ばしていた。

大地に叩きつけられ、全身を襲う痛みによつて意識を失う事もで
きず。

迫り来る死の予感と恐怖に泣き叫びそうになるが、動かぬ身体で
はうめき声一つ上げる事すらできない。

（死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない嫌だ嫌だい
やだいやだい……）

死を拒絶しながらも、暗転する意識に苦痛からの解放を感じる取
る少年。

その甘い誘惑は甘美で抗いがたく。

それでも 抗つた。

それは、何も分からず知らず、理不尽に死を迎える事への怒りで
あり、一瞬とはいえ苦痛からの解放を願い、死を受け入れようとした自分への怒り。

それは、意地。両親から託された命。自分の命の価値といつまでも
見えぬモノに対する誇りからくる意地。

少年の心は、ただひたすらに迫りくる死に抗い続けた。

どれほどの時間が過ぎたのか、それとも一瞬でしかなかつたのか。

暗闇の中であがき続ける少年に、一筋の光が差し込む。

その光を掴むと手を伸ばし

いつしか少年の視界には、太陽に向けて伸ばされた自分の腕が映

つていた。

全身に感じる痛みは耐えられない程ではなく、ゆっくりと起き上った少年は、目も耳も、自分の五感が回復している事を確認すると、覚えたての回復呪文を唱えて傷を癒した。

あれはいつたい何だつたのか。

暫く身体の状態を確認していた少年であつたが、風に吹かれて薄れ始めた砂塵の向こうから覗いた光景には、咄嗟に言葉を失つた。

「地面が……アルキードが……大地が……消えた？」

その眩きの向こう。

先程まで人々の嘗みがあつた、町が、城が、大地が。

その場所は、今は轟音と共に渦巻く巨大な入り江と化していた。少年はただ呆然と、何が起こったのか理解できぬまま、その場でただ立ち尽くす事しかできなかつた。

全てを無くしたあの幼き日のよう。

ゆっくりと視線だけを動かす。

そこには

ナニかを抱え

飛び去る

何者かの

ひどく小さな背中が見えた

アルキード王国消滅。

この報は瞬く間に世界中に広まつたが、誰にもその原因を突き止める事はできず、様々な憶測だけが飛び交う事となる。

魔王の呪い、禁呪行使して失敗した、新たな魔王が現れた。

復興の兆しも見え始め、人々がようやく以前の平和な生活を取り戻そうとした矢先の出来事であった。

この日、世界からアルキードと呼ばれた国が消えた。

その強大な暗黒の力によつて、この地上を支配せんと企んだ魔王ハドラーが、勇者とその仲間達に倒されてから十数年。

未だ各地にはその傷跡を残しつつも、人々はようやく手にした平和な時間の中で、逞しく日々の生活を営んでいた。

世界四大陸の一つであり、地上界南西部を占めるワインリバー大陸。

その地にあるヒロモス王国も、今では戦火から立ち直りかつての賑わいを取り戻しつつあった。

「だから、この際多少手強くてもいいからね？ もうひとつ金になるのはないの？」

そう言つてカウンターに詰め寄るのは、僧侶が纏う法衣をだらしなく着崩した青年である。

アバン達と別れ、一人口モスへと向かつた青年であった。

腰まで伸ばされた長い黒髪は首の後ろで一つに束ねられ、腰には細身の剣を差している。

それなりの体格の良さも相まって、一見すると戦士のようにも見えるが、青年は自分を僧侶だと主張する。

洗礼を受け、僧侶の呪文を取得しているので決して嘘ではない。嘘ではないのだが、青年の人柄や戦い方を知る者は口を揃えてこう言つ。

嘘くせえ、と。僧侶なめんな、と。

「あのなアウダー、ここはどこだ？ 口モスだぞ？ そんなに金になるモンスターを探したけりやあ、迷いの森か他の国にでも行け。オーザムとかリンガイアなんて稼ぎどころじやねえか？」

「ふざけるのは髪型だけにしとけよオッサン。大陸を越えられるような、そんな路銀があつたらね、誰が好き好んでオッサンの顔を見に来ますか」

青年の名はアウダー。

立ち寄った街や村で、ちょっととした仕事をこなしながら、ふらふらと旅を続ける二十一歳の自称冒険者である。

魔王の脅威が去った後でも、元々地上に生息していた魔物の中に

は、その生来の気質からか、魔王の呪縛とは関係なく人を襲う魔物がいる。

そういう中で、凶暴な魔物の退治や、平和になった事で再び現れ始めた山賊、海賊などの討伐、行商人の護衛や宝探しなどの荒事を生業とする冒険者という存在が、再び脚光を浴びるようになっていた。

魔王の引き起こした戦乱は、各国の軍事力を大きく削ぎ落し、かつてのように全国の兵のみで国内の治安を守る事が困難になつたのも一因である。

ここ“ルイーダの酒場”と同じく、魔王の戦乱の終結した後は、酒場や宿屋の多くはこうした冒険者への仕事の斡旋場としての役割を再開していた。

「なんだと！　この斬新な“アフロヘヤースタイル”を馬鹿にするのか！　これはベンガーナ王国で今最もナウいファッショングだぞ！」

そう言つて、カウンターから身を乗り出し、顔を真っ赤にして唾を飛ばしながら力説する主人。

そのあまりの勢いに眉を顰めながら、「誰に聞いたの」と呆れながら尋ねたアウダーに返ってきたのは、ある意味で想定の範囲内。

「黒縁の眼鏡をかけて、髪の毛がこうクルクルとした兄さんだ！」

「あ～、うん。やっぱりね。何と言つたか、ゴメン。何も言えない」

懐から取り出したハンカチで、飛ばされた唾を拭きながら、アウダーは相変わらずムチャクチャ言つなど、心当たりの人物を思い浮かべていた。

アバン・デ・ジュニアール三世。

自称勇者の家庭教師、という変人である。変態ではなく、変な人という意味での正しく変人。いや、これもまたある意味で変態かもしれないが。

アウダーとは、出会った先で何度も一緒に仕事をした仲はあるが「どういう人物か？」と問われれば、そうとしか言いようがない。確か、今は弟子のポップと一緒にパプニカへ渡つたと思っていたが。

あの後、結局船に乗れずに口モスに来ていたのだろうか。

「ま、可哀想なオッサンはおいといて。今日はルイーダちゃん居ないの？ 僕、あの娘がいるからここを利用してるのよ？ オッサン、いいから隠してないで出しなさい」

「お嬢はお城に定期報告。残念だが今日一田は戻らねえよ。つーか、オッサンを連呼するんじゃねえ！」

まったく、どいつもこいつもルイーダ、ルイーダと言いやがって、とぼやきながら不貞腐れる主人。

諸国に比べて、魔物の被害という意味では比較的安全な部類に入るロモスには、冒険者に向いた仕事というのはあまり多くはない。

つまりは平和であるのだが、それはソレ、これはコレ。

そんな中で、ここルイーダの酒場が繁盛しているのは、王国直轄の斡旋場である事と、客の大半が酒場の名前にもなっている女性、ルイーダ目当てのが大きい。

「なんだ、今日はハズレの日？ んじゃもういいや。オッサン、一番安い酒頂戴。もうね、今日は飲んで寝るよ。お兄さんは頑張った」

「大概失礼な奴だなお前は。頑張つたって、まだ何もしてねえだろ

「うが」

昼間ツから何言つてやがる、とその言葉に苦笑しながらも、注文よりも少しだけ良い酒を出そうとする主人。

何だかんだ言つてはいるが、請けた仕事はちゃんとこなすし依頼人からの評判もなかなか良いアウダーは主人にとつて手放し難い大事な客だった。

「オッサンに若さを吸い取られないように頑張ったんだよ?」

やつぱりどうでもいいか、こんな奴。
さりげなく記帳した代金を上げる主人。
酒のランクも落とす。
ちなみにツケである。

渡されたグラスを手にしたアウダーは、ぼんやりとグラスを眺めていると、そこに映つた絵が気になり、背後の壁に張られた手配書に目を向けた。

「オッサン、何あの張り紙。新しい手配書?」

凶悪な魔物や犯罪者などが描かれた紙の貼られた看板に、一際目立つ物があった。

翼の生えたスライムが描かれたその紙は、日に焼けた跡もなく歪みも少ない事から、比較的新しい物だという事が分かる。

「ああ、『ゴールデンメタルスライム』だとさ。デルムリン島つて知ってるか? どうやらあの怪物島に居るらしいんだよ。どこかの好事家が欲しがつてしているらしくてな。デルムリン島つて事が嘘くさいんだがよ。一体誰が確かめたんだ、つてな。まあ、それでもだ、あそ

「こなら何が居てもおかしくないってのが微妙だよな」

「一、十、百……百万ゴールド…？ ありえないでしょ、ナーノレン
？ ビーの馬鹿野郎？ ロイツのイタズラじゃないの？」

あまりに馬鹿げた金額に、アウダーは思わず口にした酒を噴出し
そうになる。

ちなみに、その横に『いたずら注意』と書かれた小憎たらしい表
情の大ねずみの手配書もあったが、その金額は十ゴールドである。

「依頼主は確かだよ。『ゴールドだつてちゃんと払えるべらじのな。
まあ、それだけ希少だつて事なんだろ?』

金を持つている奴は持つてるんだよ、そう言つ主には哀愁が漂
つていた。

「デルムリン島にねえ。あの近くまでだつたら、この間行つたけど
ね。そんな珍しいスライムが居るなら、あの時漁師さん連中に無理
言つても上陸させてもらえばよかつたか？」

先日、アウダーは近くの港町に住む漁師から、漁の邪魔をする海
の魔物“マーマン”を退治して欲しいとの依頼を受けて、デルムリ
ン島近くの沖合まで行つている。

件のマーマンであるが、仲間を引き連れて現れたので、とりあえ
ずリーダー格とおぼしき一匹に少し派手な一撃を打ふると、涙目に
なつてさつさと逃げ出してしまった。

まるで弱い者いじめのようで、どうにも居た堪れなくなつたアウ
ダーは、魔物に怯えて待つっていた漁師達に、島に近づかなければ大
丈夫と報告した。

世界のどこかにあるとこ、心優しき魔物達の最後の楽園。

誰もが魔物を恐れ、信じようとはしないその噂の場所は、案外デルムリン島なのかもしれない、その時の光景を思い出しながら、アウダーはグラスを口にした。

特に急ぎの予定もなかったアウダーは、そのまま主人と雑談を続けていた。

やれ、あの店のサービスはどうだの、道具屋の看板娘さんが最近化粧を覚えたのはどうだのと。

「馬つ鹿、オメ、あの尻が良いんだろ？が、尻が」

「だからオッサンなんだよオッサンは。分かつてないなオッサンは。尻とか胸とかはいいんだ。愛だよ愛。あとは性格と顔とプロポーション」

「だから！ オッサンを連呼すんじゃねえ！ 結局全部じやねえか！ ふざけんなこのヤロウ！…」

「ナメンナよ？ 巨乳だろうが貧乳だろうが問わないぜ？」

女性についてどういう言う前に、自分達をなんとかしるとはこの時酒場にいた客達の共通の見解であつたが誰も口にはしない。

いい感じにぐだぐだになり始めた二人はなおも止まらない。いつもであればこのあたりでルイーダの鉄拳が唸るのだが生憎不在。

やがて互いの生活態度に話が向かい、アウダーがかなりの数の魔物討伐を行っている事に、仮にも神に仕える僧侶様がそんな好戦的でいいのか、と主人が問えば「それはそれ、これはこれ。今の世の中、人間生活していくにはお金は大事よ」と、これまた聖職者にあ

るまじき浴っぽい答えを返す。

(（謝れ！ 世界中で一生懸命頑張っている僧侶たちに謝れ！！）（

店内の客たちの心が一つになつたが、馬鹿一人には届かない。

そりやあそだ、と馬鹿一人で笑いあつていると、

「あなた、デルムリン島に行つた事があるのなら、私達を手伝ってくれる気はないかしら？」

背後からのどこか媚びるような艶を含んだその声に、アウダーが振り返つた先には四人の男女の姿があった。

グラスを持つた女僧侶と、小柄な老魔法使い、巨漢の戦士と囁つきの鋭い男である。

「船は手配できたんだが、案内人がいなくてね。できれば手伝つてもらえるとありがたい。もちろん報酬は払う」

眼つきの鋭い男の言葉に、盗み聞きとは趣味が悪いな、と思つたアウダーであつたが、懐が寂しいのは事実。

報酬の部分を強調されたのは、金さえ積めばと思われているようで、釈然としなかつたが、

（案内するだけで構わないのなら暇つぶしにもなるか）

そう考へてみると、興奮した様子の主人がアウダーに詰め寄りまくし立てるよに話しおした。

「おー、ありやあ、最近噂になつてゐる勇者様御一行だぞ。凄いじ

やねえかアウダー。勇者様直々の「」氏名を貰えるなんてよー。」

別に道案内が出来れば誰でも良かつたんだろ、と思ははしたが、主人のアレなはしゃぎつぶりに黙つておく事に。

(それにしても、またえらく嫌な感じのする勇者様だこと)

勇者という言葉で、アウダーの脳裏に年甲斐もなくサインをするあの変人さんの姿が浮かんだが、頭を振つて搔き消す。

そういうしている内に、主人と勇者様との間で、アウダーが御一行の案内をする事が決定してしまつていた。

「ほつ、お前さんがあのアウダーか。なかなかに評判の良い冒険者らしいの」

老魔法使いの人を值踏みするような田線に少し腹が立つたアウダーだが、俺は大人、俺は大人と自制する。

「勇者などと大それた者でもないが。さて、私の名前はでろりん。彼女はずるほん、そこにいる魔法使いがまぞつほ。そして彼がへろへろだ」

その丁寧で礼儀正しい姿勢に胡散臭さも感じはしたが、「よろしく頼む」と、でろりんから差し出された右手をいつまでも放つておくわけにもいかず。

急ぎの仕事もないし主人の顔を立ててやるかと、アウダーはその手を取つた。

「アウダーだ。ま、短い付き合いになるだらうけどな。ようしく頼
むわ、勇者様」

降り注ぐ太陽の光を反射してきらめりと輝く穏やかな波間に上を飛沫をあげて進む一隻の帆船。

その甲板には、目前に迫ったテルムリン島を眺める四人の男女の姿があった。

「思つていたほど……大きくはないな」

手にした望遠鏡を片付けながら、それに近くに魔物はいないうだと告げるでろりん。

「キッヒッヒッ。あれだな、モンスターの生き残りがウジャウジャいるつていう島は……」

「またひと暴れしてやるかあつ！」

これから仕事を想像し、嬉々としてそれに答えるまどつほとへろへろ。

彼らからは、魔物の住む島に向かう事への緊張感といったものは感じられない。

「魔王が死んで、大人しくなったモンスターをいびり倒してりや、後は周りが勝手に勇者様と崇めてくれる」

こんなにオイシイ商売はないぜ、と顔を歪めて笑うでろりんに、まったくだと答えてまぞつほとへろへろは笑う。

「……ちょっと待ちなよ」

そりやつて笑いあう三人を制止したのは、腕を組みながら彼らを睨み付けたずるぼんであった。

「アイツのことを忘れてるんじゃないでしょ？ 嫌よ、ここまで来て計画をおじやんにされるのは」

「む」

「まあ、そりなんじやがな」

どうにか船は手配できたものの、魔物への恐怖からか、なかなかデルムリン島までの案内人が見つからない。

戦う力を持たない普通の人にとって、魔物の巣窟とまで言われるデルムリン島に行くなど正気の沙汰では無かつたのだ。

これからどうしようかと、酒場で話し合っていたところ、偶然にも耳にした会話。それは彼らを惹き付けるには十分過ぎる内容であった。

『デルムリン島にねえ。あの近くまでだつたら、この間行つたけどね』

そして主人と雑談を交わしている青年のだらしない姿に、金で釣れそうだと考えたでろりん達は、この訪れた幸運に感謝しながら青年　アウダーを利用する事に決めた。

あまり乗り気ではない様子だったが、都合のよい様に誤解をしてくれた主人のおかげで案内人として雇えた。そこまでは良かつた。問題は、まぞつぼがお世辞で言つた「評判の良い冒険者」が事実だつた事。

準備があると言つて一日別れた後、でろりん達がアウダーについて

て調べてみれば出るわ出るわ。

この一ヶ月の間にこなした依頼は十八件。その全てが魔物の討伐という偏りつぱりに呆れましたが、迷いの森のライオンヘッドを一人で仕留めたところには、でろりん達も顔を引き攣らせるしかない。

正直、自分達より勇者らしくないか？と思はしたが、酒場で見た彼のあのだらしない姿、気の抜けた駄目っぷりを見せられても、誰も勇者などと呼びはしないだろう。

「外見や雰囲気ってのは大事だよな」

「まつたくだな」

「雰囲気はだいじだ」

「うんうん」と頷き合いつでろりん達を「いい加減にしな！」と、尻をつり上げて睨み付けるずるばん。

背筋を伸ばし直立の姿勢で固まる男達。

「そりゃないだろ！ アイツに知られたら面倒だつて言つてるんだよ！ 今回の目的を忘れてんのかい？ 横取りされたらどうするんだい！」

「まあまあ、そういうきつ立つでない。小皺が増えるぞ？」

肩を怒らせて興奮するずるばんを宥める、一ヤリと口元を歪めてまぞつぼが続ける。

「なーに、心配はいらんよ。さつきあいつが船室に降りよった時に、いつもドア越しにラリホー（睡眠呪文）をかけてやつたからな。

当分は田を覚まさんて。どれだけ強かろうと、油断しておれば必ず
とでもなる」

それにワシのワロホーは天下一だからな、そいつって胸を張りま
ぞつほは笑つた。

「ふうん、ならいいんだけどさ」

自信たっぷりに言い切つたまぞつほに、それでも念を押す事は忘
れない。小皺の件は後で聞いただす。

「ならいいんだけどね。いいかい、忘れるんじゃないよ。あたし達
の目的は モンスター退治じゃないんだ」

「世界に一匹しかないという幻の珍獣……」

「ホールデンメタルスライム……か」

まぞつほの言葉に、口元を歪めるでろりん。

「でも、本当にこるのか？」

「いなーいなら島中皆殺しにして、いつも通り報酬を頂くだけよ

笑みを浮かべて返すずるぼん。

悪党め、とそれを笑うでろりんであつたが、船のものではない激
しいしぶきの音が聞こえ、慌てたように視線を海へと向けた。

そのただならぬ様子に、何事かとその視線を追うように海を見た
三人の視界に、マーマンの背に乗つて船へと近づく人影が映つてい
た。

「な、なんだい？ 新手の魔物かい！？」

「ま、まぞつほ。魔法だ魔法！！」

「お、おおう。え、えーと、えーとなんじやつけ！？」

途端にパニックを起こす三人。

でりりんも内心かなり慌てていたが、目の前でこれだけ慌てられるのを見ると、逆に落ち着けるもので。

「お前ら、本当にアドリブに弱いな」

自分の事は棚に上げ、向かって来る人影に田田を凝らす。

「落ち着け、お前ら。あれは……子供か？」

「あ～っ！ や、やつぱり本物だあ！」

マーマンの背から甲板へと器用に飛び移り、四人の前に立ったのは黒髪の少年。

ぱっちりとした目、背中に背負つた木刀と右頬にある十字の傷。まだあざけなさが残るもの、その印象はまるで田舎の腕白坊主である。

「ほ、本物の勇者さまですね！」

感激した様子で「す」「いやー」と連呼して、ぎゅうぎゅうとせわ

しなくでろりん達の様子を伺う少年。

思わず背中の剣に手をかけるでろりんであったが、それを制したのはぼんであった。

男達に何も言ひなと田線で合図すると、今まで彼らには見せた事がない優しい表情を浮かべてするぼんは少年に話しかけた。

「ぼんや、あなたは？」

「おれつ、ダイです！」

子供達にとって勇者とは共通のヒーローである。
夢にまで見た、憧れの存在である勇者と出合えたといつ緊張のため、直立の姿勢で答えるダイ。

デルムリン島で暮りし、そこに生きるモンスターは全て自分の友達なんだ、と嬉しそうにするぼんの質問に答えるダイ。

一人から少し離れて様子をうかがっていたでろりん達は、あまりにも上手く進むこの状況にほくそ笑んでいた。
しかし

（（（女つて））えーな）（）

内心、そう思っていた事は彼らだけの秘密である。

背中に叩きつけられた様な衝撃、次いで鼻に感じた激痛、口中に広がる潮の味。

「ぶつ……、うわっ、つふ！？　ぶるあああああああハアアああ！！！
はあ、は、あ、ハアハアは、は……は？」

ラリホーの効果が消えて目を覚ましたアウダーは、自分の置かれた状況に愕然としていた。

前を見れば去つて行く船、後ろを見れば所々から煙を立ち昇らせているデルムリン島。

そして自分は海の中。

「…………やられた…………」

アウダーは最初から彼らを信用も信頼もしてはいなかつた。

しかし、本物か偽者かはともかく、人々に顔の知れた勇者様御一行が、まさかこんな強硬手段を取るとは思いもしていなかつた。予想すらしなかつた。というより予想できる訳がない。

(……本当に短い付き合いでった)

ご丁寧な事に、身包みを剥がされてはいなかつたが、財布に道具袋が無い。

大事な荷物は宿に置いてあるので、財布の中身については一晩豪遊をかましたと思えば、思えるかこの野郎。

剣を残してくれているのはせめてもの優しさと取るべきか、デルムリン島で一生過ごせとのメッセージと取るべきか。

「フツ……穂やかな日々は一流の戦士を牙の抜けた狼にしてしまうのだな」

格好良くなきめてみたが、それに反応してくれる者は誰もいない。

「……二倍返しだコノヤロウ」

それは基本だと復讐を決意したアウダーは、取り敢えずはと、デルムリン島へとゆっくくりと泳ぎ始めた。

そして泳ぎ続ける事しばらく。

どうにか海岸に上陸を果たしたアウダーは、砂浜に剣を放り出すと、頭を振って水気を飛ばし、長い髪を絞る。

いっそ髪を切るか、とも思つたが 止めた。

そして、濡れた上着を脱ぐと、八つ当たりをするかのように力強く絞り上げる。

本当はズボンとブーツも何とかしたいところだったが、ここには未知の怪物島。何があるか分からないと考えて諦めた。

パンツ一丁で戦う男、そんな重い十字架は背負いたくはなかったのだ。

実際、島の奥からはなんだか分からないが叫び声のようなものが聞こえている。

「出っ歯？ 居る居る？ 何だ？」

人の叫びにも聞こえるが、この島に人間が住んでいるなんて話は聞いたことが無い。

もつとも、誰も確認したわけではないのでないとは言い切れない。

い。

「人がいるならラッキーなんだけどな」

幸いにも田は高く、照りつかる日差しはそのまま海に入りたいと思つほど。

しばらくすれば乾くだろうと、絞り上げて少しほマシになつた上着を着直して、投げ捨てた剣を腰に差したアウダーは、島の奥へと足を向けた。

「ふう、これである程度の怪我をした者は……もつおらんな?」

海岸から少し奥に入った場所である。
周囲に横たわる負傷した魔物　住人達の姿を見て、これも因果
応報という奴なのかもしれん、と溜息を吐く一匹の年老いた魔物。
幾多の呪文を操る鬼面道士。名をプラスといつ。

デルムリン島に住む、争いを嫌い、平和を望んだ魔物達の纏め役であり、この島に流れ着いた人間の幼子を、魔王の呪縛から解き放たれて取り戻した善なる心をもつて、厳しくも温かく育てた心優しき魔物である。

流れる汗を拭いながら、やれやれと近くの岩に腰を下ろす。

そうして一息ついたプラスであったが、その表情が晴れることはなかった。

「どうしたものかのう

眉間を抑えながら、思い出すのは先程の大切な息子
ダイとの
やりとりであった。

ダイが勇者様と紹介して連れて來た四人の人間達による、突然の

襲撃。

抵抗すれば良かつたのであらうが、この島にすむ住人達は皆争い事を拒み集つた者達。

自衛のためとはいえ、その牙や爪を振るう事を躊躇う者が多かつた。

不幸中の幸いか、さしたる抵抗もしなかつた事で命まで失う者はいなかつたがその傷跡は深い。

彼らの目的はこの島の住人であり、ダイの親友である「ゴーレーデンメタルスライム」ゴメの捕獲。

眼前の光景に怒り、彼らに果敢に立ち向かつたダイもまた返り討ちにあい傷を負つてしまつ。

騙され、島の皆を傷つけられ、大切な友達を連れ去られて、怒りと悲しみに震えるダイに、思わず与えてしまつた力。

魔法の筒 中に生き物を一体だけ封じ込め、呪文を唱える事で中の生き物を出すことも、筒を向けた相手を閉じ込めることもできる魔法道具。マジックアイテム

良かれと思い渡したもの、それを人前で使つてしまつた場合、普通の人間にはそんなダイの姿がどう映るのであらうか。

それが遙か昔に存在していた“魔物使い”として見えてしまつであればまだいいが、ダイ自身が魔物として恐れられてしまつのではないか。

人間が、時には魔物すら恐れるほどの凶悪な一面を見せる場合がある事を、プラスは知つていたからだ。

しかし、現状であれ以外にダイの思いを適える事も、攫われたゴメを救う方法も無かつたと、プラスは苦悩する。

耳を澄ませば、島のあちこちから、ダイの「イルイル！」と呪文を叫ぶ声が聞こえてくる。

比較的軽傷であった住人達を集めて、やはりあの偽者共の元へと

行くつもりなのだろうと察し、どうにもならない現実に歯噛みする。

周りで傷を癒す住人達も、プラスと同じことを思っているのか、ダイの声が聞こえる度に、心配そうな様子でその方向へと顔を向けていた。

だから、気付かなかつたのだろう。

自分達のすぐ近くに、招かれざる客がもう一人やつて来ていた事を。

「あんな奴ら勇者でもなんでもないっ！ 一緒に歩いてぶちのめしてやひづば！」

「がうがうー！」

木々が生い茂る森の中。

そしてゴメちゃんを取り戻そう、と続けるダイの言葉に、了承を示すように前足を器用に挙げて答えるサーベルウルフ。

頬に絆創膏を貼り、所々に包帯を巻いた痛々しい姿であるが、ダイの瞳に諦めの色はない。

住人達もさすがに仲間がさらわれてしまつた以上、このまま何もせず黙つている訳にもいかなかつた。

「がうッ！ 」

「よお～し、いくぞーっ。イルイルッ！」

ダイが手にした魔法の筒を向けて呪文を唱えると、サーベルウルフは淡い光に包まれて筒の中へと消えていく。

「頼むよ」

それを見届けると、五体満足であつた島の住人のほぼ全てが協力をしてくれた事に、ダイは胸に温かいを感じ、より一層決意を強くする。

「やっぱじいちゃんはすつごいよなー。こんなアイテムを持つているなんて。でも、もつと早く教えてくれても……」

プラスにしてみれば、立派な魔法使いにしたいとの願いもむなし、勇者を夢見て腕白盛りに育つてしまつたダイの悪戯を警戒して話さなかつただけである。

そうして島中を周り終え、ゴメ救出の準備が整つたダイは、その事をプラスに知らせるべく駆けだそうとして

「な、誰だ！ サツキの偽者の仲間かっ！？」

その時、木々の隙間から見えた見慣れぬ人影に声を上げた。

背中に差していた木刀を握り締めて、じっと人影へと注意を払う。

「誰だッ！ 出て来いつ！」

「あ～、はいはい。そう怯えなさんなつての」

そう言つて現れたのは一人の青年。

その腰に差された剣に気が付くいたダイは、途端に偽者達に襲わ

れた時の事を思い出してしまい、その恐怖に木刀を握る手が震える。

(つ！ 怖がるな、怖がるな、怖がるな。ゴメちゃんを助けるんだ
！ みんなのカタキを討つんだ！ 僕がみんなを守るんだ！)

友達や島の皆の事を思つ。するとダイの身体から緊張が抜け、恐怖は去り、眼前の敵へと立ち向かう勇気が湧いてくる。

「これ以上、みんなを傷つけるなんて俺が許さない！ そつする気なら、俺がやつづけてやる！」

子供とは思えない鋭い踏み込みを見せ、上段に構えた木刀を目の前の青年へと真っ直ぐに振り降ろした。

しかし

ダイが全力で放つた那一撃は

青年の掌へと吸い込まれるように

パンと乾いた音をたてて受け止められていた。

「う、あ……ぐ、くつそー！ 放せ！」

その光景に、一瞬呆然としたダイだが、慌てて青年の手から木刀を取り戻そうと躍起になつて力を込める。

どれだけ力を込めてもびくともしない状態に、ダイは木刀以外のことから完全に注意を欠いていた。

その事に気が付いたのは、自分の頭に置かれた掌の感触を感じた時だった。

「ホイ!!」

咄嗟に目をつぶってしまったが、全身を包み込む暖かい感覚に閉じた目を開く。

全身を包むやわらかな光。それが回復呪文の光である事を察して、ここによくやくダイは落ち着いて青年の顔を見る事ができた。少しだるそうな表情をした青年であったが、彼の浮かべる苦笑に、ダイへの敵意は感じられない。

木刀から手を離し、自分の身体を見れば怪我が治っている。

ひょっとして自分はとんでもない勘違いをしたのでは、と慌てて青年を見れば、つま先を押されて蹲っていた。

タイミングが悪かった、としか言いようがない。

青年 アウダーが落ち着いたかと、木刀を手放したのとダイが手放したのは全くの同時。

当然、重力に従つて木刀は落下した。
アウダーの左足、その小指の上に。

海岸から現れたアウダーが、偽者共にしてやられたと経緯を話し、あの場にいた島の住人達の傷を回復呪文によって治療した後。プラスがいつまで経つても戻つて来ないダイを心配し、何かあつたのかとアウダーと共に探しに向かつた先での出来事であった。

「あれは……痛そうじゃのう……」

物陰から一人の様子を見ていたプラスは、タンスの角に足の指をぶつけた時の事を思い出し、身が震える気分になつた。

ブーツの上からとはいえ、あれは痛かるうじ。
目の前ではひたすら謝罪を繰り返すダイ。

心配をかけまいと大丈夫だと平静を装いつつも、その目が泳ぎまくつていて明らかに不審過ぎるアウダー。

どうにも進まない状況に、プラスは溜息を吐き一人の前に姿を現す事にした。

暴力に訴え、他者が傷つく事も厭わない人間。
癒しと許しを与える事の出来る人間。

十人十色。人間とは、やはりよく分からぬ不思議な存在だ、と思ひながら。

すまない、と頭を下げたアウダーを前にして、ダイはそれだけで
答えたものかと悩んでいた。

田の前の青年が、親友である「口メちゃんを攫いに来た偽勇者達の一
味であつた事には、確かに腹が立つた。

しかし、偽物達を本物の勇者様と勘違いして島に招き入れたのは
ダイ自身である。

プラスが言つたのは、アウダーは怪我をしていた皆の治療を手伝つ
てくれたらしい。

事情を聽けば、元凶はあの偽者達だという事は分かる。
島の皆を助けてくれたアウダーを、今更非難するつもりはダイに
は無い。

(気にするなよ、は違う。騙された同士だね。……違う。うへへん
……なんて言えばいいんだ?)

ダイは考えるよりも先に動くタイプであつたため、口ひやつて思
い悩むような事は苦手だった。

だから 難しく考えるのは止めて、まずは思つた事をそのまま
口にする事に決めた。

「歯を助けてくれてありがとう」

「いや、ホントにすみません……は?

非難の一矢一矢は覚悟していたアウダーは、そつと笑つてへへへ
と笑うダイの姿をまじまじと見た。

そうして暫く、呆然とした表情でダイを見ていたアウダーであったが、

「ははッ、ははははは！」

やがて声を上げて笑い始めた。

「……いや、悪いな。ホント、お前さ、きっと大物になるわ」

そう言って、ダイの頭をガシガシと撫でまわす。

「うわっ！？ な、なにするんだよッ！？」

子供扱いするな、と頬を膨らませるダイ。その反応を見て更に笑い出すアウダー。

そんな二人を見ながら、プラスはダイの出した答えに満足そうに頷くと、「では皆の所に行こうか」と、一人を連れて歩きだした。

デルムリン島の北部、その小さな岬に立つ三つの人影。
ダイとアウダー、そしてプラスである。

体に巻きつけたベルトにありつたけの魔法の筒を装備したダイは、その中の一本を取り出ると、天にかざして解放の呪文「デルパ！」を唱えた。

ポンという音と周囲に広がる眩い光。そこに現れたのは、翼を持つた空飛ぶ魔物キメラであつた。

「よ～しつ～ 賴むぞキメラ～」

「キュイイイツツ～！」

「へ～、また珍しい……魔法の筒か。実物なんて初めて見たぞ」

「こりゃ、待たんがダイツ～！」

準備万端と意気込むダイに、プラスは隠し持つていた金色に輝く“特別な”魔法の筒を取り出そうとして その手を止めた。
大事な事を確認していなかつた事に、今になつて気付いたからである。

「ダイ、確認をしておくが……。お前は、あの偽物達がどこに行つたのか、知つてあるのか？」

「え？ じいちゃんが知つてるんじゃないのー…？」

これに慌てたのはダイである。
だつて何でも知つてるじゃないかと続けるダイに、もつと勉強をさせようと心に誓つプラス。

「「……ハア……」「

この微妙な雰囲気を破つたのは、この親子のやり取りを黙つて見ていたアウダーだった。

「まあ、十中八九口モスだな。プラス爺さん、“キメラの翼”を持つてないか？ キメラを前に言つのも何だが」

キメラの翼とは、雷に撃たれ死んだキメラが落とした翼を、特殊な秘術を用いて加工する事で作り出される非常に希少なアイテムである。

天に向けて放り投げ、翼が地に落ちるまでに行きたい場所をイメージすれば、その場所に一瞬で移動できるという効果を持つ。

非常に便利な道具だが、キメラの数が少なくなり、その入手の困難さ、成功や失敗に関わらず一度使えば失われるアイテムである事もあって、今では一部の王族や富豪だけが手にする高級品となっている。

「む、確かに……一つだけなら有ったと思つんじやが

「そつか。だつたら、悪いけどそれを使わせてくれないか？ 僕が使えばダイを連れてロモスに行ける。仮に、奴らがロモスに居なくともアレだけ目立つ連中だ」

「え？ アウダーも手伝ってくれるのー？」

探し出すのは簡単だ、と肩をすくめて答えるアウダーは、一緒に行つてくれるんだ、と喜ぶダイ。

キメラを再び魔法の筒に戻すと「早く行こう！」とアウダーの手を取つて急かし始めた。

「それはこちらとしてもありがたい話じゃが、アウダー殿は良いのですかな？ 爭い事は避けられぬと思つのですが

そう言って「落ち着かんか」と、プラスは手にした杖でダイの頭を小突く。

「それに、これはこの島の問題ですからな。遅かれ早かれ、いつか

は」のような事が起きたであらうとは思つておりました

「殿はいらないよ。義理と人情。俺がそうしたいと思つたからそうするだけ。プラス爺さんが気にする事はない。それに、やられたらやり返すのが俺の主義」

三倍返しは基本だろ、と怪しく笑うアウダー。

「ハ、ハハハハ……。そ、それではキメラの翼を探して来るので少し待つていて下され」

プラスは引き攣った笑みを返す事しかできなかつた。

「行つてくるよ、じいちゃん！」

「くれぐれも気を付けてな。アウダー殿、ダイを頼みます」

興奮ぎみのダイとは違い、プラスの表情に余裕は無い。
その内に、どれほどの葛藤があるのか。

アウダーには想像もつかない事だつたが、分つている事は一つある。

「ゴメちゃん」とやうと一緒にダイは無事に返すよ」

ひらひらと手を振つて答えると、アウダーはキメラの翼を放り投げ 口モスへ、と念じる。

眩い光がアウダーとダイを包み込み、光の玉と化した二人は瞬く間に大空へと飛び去つて行つた。

「……ダイ！」

無茶だけはするなと、手にした杖を握りしめる。そうして飛び去った二人を眺めていたプラスであったが

「ん！？ し、しまつたーーっ！… 忘れておつたーーーっ！…」

慌てて自分の部屋に戻ると、そこにはダイに渡すつもりであった金色に輝く“特別な”魔法の筒が転がっていた。

「……ま、まあ。アウダー殿もあるんじゅし……大丈夫……？」

第2話 胎動

「おおっ、勇者でろりんよ。よくぞ無事に戻つてしまつた。そなたらの無事な姿を見て、このシナナ安堵したぞ」

ロモス王城 謁見の間

（――）ロモス王国の国王であるシナナ王は、生来の温厚な性格と気さくな雰囲気、寛大さ、その人柄と善政によつて、国民に慕われて

いる。

少々間の抜けたところや、五十歳を越えてなお子供っぽい好奇心を隠そうとしないところが、側近からは苦言を呈されるところだが、かえつて親しみのある王様だ、とは国民の意見である。

両脇に並ぶ家臣や兵士達を「樂にしてよい」と下がらせると、シナナは正面にかしづく四人の男女を見た。

こうして謁見の間であつても、田の前の勇者達の冒険譚を一刻も早く聞きたくてうずうずとしているのは誰の田にも明らか。彼は、自分が国王といつ立場である事に不満は無く、誇りと熱意を持つて善き国王足るうとしている。

しかし、心の隅には田の前の冒険者達のように、気の向くまま自由に冒険をしてみたい、という思いがあるのも事実であった。

「さて、でろりんよ。このたびは魔物たちが巢食つているといつ魔の島、デルムリン島への冒険であつたそつだが……」

玉座へと続く真っ赤な絨毯の上で、膝を付き頭を垂れるでろりん達。

思わず浮かぶ笑みを、必死に抑え込みながら、シナナの問いに答える。

「はつ、邪悪極まりない魔王の残党共が次から次へと襲い掛かつてまいりましたが――」

そこで言葉を切り、ゆつくりと立ち上がつたでろりんは両手を広げ、まるで吟遊詩人が伝説を謳つ様に続ける。

「頼もしい仲間達と力を合わせ、正義のために戦う我々の前では、いかに凶惡な魔物であろうと恐れるものではありません！」

あまりにも芝居じみた行為であったが、この場では効果はできめんであった。

周囲からの感嘆の声や、自分に向けられる尊敬の眼差しを感じるたびに、この後に見せるモノへの反応が楽しみで。

でろりんは、顔がニヤケそうになるのを必死で堪えて続ける。

「その戦いの中、一匹の珍しいモンスターを発見いたしました。殺さずに捕えてまいりましたので、王様に献上しようと思って」

その言葉に合わせて、ずるぼんは脇に置いていた小さな箱を、そつとでろりんに差し出す。

「そう、これが」

その蓋を開ぐと共に、周囲には溢れんばかりの金色の輝きが広がった。

その神秘の光を見た人々の感動は、どれほどのものであったのか。シナナもまた、そのあまりにも美しい輝きに見惚れてしまい、最早溜息しか出でこない。

「伝説の、幻の珍獣と呼ばれる『ゴールデンメタルスライム』ですわ」

「まさしく……生きた宝石です」

「な、なんと！ なんと素晴らしい……見事じゃでろりん、そなたの望むままの褒美をどうせよつ……！」

沸き上がる歓声。

「でろりんこそまさに眞の勇者じやー！」

感じた喜びのままに、四人を賞賛するシナナ王。

周囲の家臣や兵士達も、次々とでろりん達に拍手と賛辞を送る。
まさしくこの世の春を謳歌するでろりん達。

彼らの目の前には王の言葉に従い、次々と運ばれてくる宝箱や金貨の輝きが溢れている。

「今宵は宴を開き、勇者達の帰還を祝おうー。そして、その席上で
余は眞の勇者にのみ与えられるという霸者の冠を授けるであらうー。
！」

勇者様万歳！

シナナ王の宣言に沸きあがる人々。
たちまち興奮に包まれる城内。

しかし

その歓声の中で、檻の中で捕らわれていた小さな魔物が流して
た涙など、誰も気に留めることはなかった。

「.....ルルルルイーー」

「うつわー、すっげーー！ 本当に一瞬だつた。アウダー、あれが口
モスなのーー？ ふえー、人や建物があんなにーー、あ、あれがお城か

「、でつかいな～

アウダーとダイが移動した先は、ロモス王国の城下町を見渡せる
小高い丘の上であった。

毎時という事もあり賑わいを見せている城下町の光景に、おのぼ
りさんよろしくはしゃいでしまうダイ。

「気持ちは分かるが落ち着け」

「……大丈夫。分かつてる」

一転して、ダイは思い詰めたような表情となってしまつ。

「気負い過ぎだ」

ダイの頭をぽんぽんと叩き「観光はお友達を助けた後にな」と、
城下へと歩き出すアウダー。

「……うん~」

力強く頷いたダイは、先を行くアウダーを追つて駆け出した。

(待つててよゴメちゃん、俺が必ず助けるからー！)

ルイーダの酒場。

酒場と名乗つてゐるように、基本的には夜間の営業がメインであ

る。

昼間は掃除や料理の仕込みなどで忙しく、片手間で冒険者への仕事の斡旋を行つていて程度である。

せいぜいが、常連相手に軽い食事を出すぐらじであった。

しかし、今日は特別の日。

凶悪な魔物を退治したとこゝの勇者の活躍は、城内から瞬く間に城下へと広がり、一気に国を挙げてのお祭りムードへ。良く言えば、王家と国民の強い一体感、悪く言つならノリが良いとこゝの事か。

シナナ王もそつであるが、国民性とでも言おうか、この国の人々は他国に比べておおらかな面が田立ち、お祭り好きとこゝ一面が強かつた。

兎にも角にも、そんな活気に湧くこのチャンスを逃してなるものか。

そこで、主人は酒場の開店時間を大幅に早めてみた。その結果

「オヤジー、こつちにホール3つー！」

「おーい、ルイーダちゃん、こつちだこつち

「何だよ何だよ、こつちが先だろー」

「嬢ちゃん嫁に来てくれーーー！」

「つむれこー 落ち着けこの酔っ払いー！」

「ぎやはやはは。何だ、また怒られてるのかゴメスー！」

昼食時で賑わう店内には慌ただしく動き回る姪の姿。その予想以上に活気づいた店内の様子に、俺つて商才があるんじやないかと二ヤケる主人。

「勇者様ありがとうございます」

天に向かつて感謝を述べる。

「勇者様はいいんだけどさ。アウダーはどうしたのかな？」

「んあ？ ああ、そうだなあ」

料理を取りに来たルイーダの言葉に思い返す。

勇者様勇者様と言われてはいるが、その話の中に一緒に行つていたはずのアウダーが全く出てこない。

「ただの案内人が英雄譚に語られる事が無いのは仕方が無いんじゃねえか？」

とは言え、依頼には違いないのだから、結果報告のために顔ぐらいは見せに来てもおかしくはないのだが。

さて、と主人は顎を撫でる。

「元々、あいつは旅人だからな。あれだろ？ 路銀が都合出来て、そのまま旅にでも出たつて事も考えられるわな」

「そりかなあ？ それならそれでいいんだけどさ。でも、一言ぐらいあつてもいいと思わない？」

薄情な奴め、と。どこか憮然とした表情のルイーダに、本人そつ

ちのけで勝手に話を決めた事を叱られた記憶が蘇り、主人は慌てて話を変える事にした。

「ほら、早く持つて行け。お密さんが待つてるんだからな

「あ、うん。つて、こらそー。酔っ払い！ お皿を投げるな…！」

高いんだぞ、と慌しく駆け出すルイーダ。

「……まあ、アウダーなら何があつても大丈夫だろ」

そう思つ事にして主人は次の料理に取り掛かつた。

「駄目だな、他の店に行こう」

宿に戻り、置いていた荷物から昼食代を確保したアウダーは「とりあえず飯を食つとくか」と、ダイを連れて馴染みと化したルイーダの酒場へと向かつた。

ダイとしては、一刻も早くゴメを助けに行きたかったので、そんな暇は、と文句を言おうとしたが、運悪く腹の虫が鳴つてしまい。

慌ててアウダーを見れば、ニヤニヤと笑っている。

なんて性格の悪い大人だ、と思つたが空腹には勝てず。

そうして渋々ついて行つた店の前で「ちょっと待つてろ」と、入り口の陰から不審者よろしくこそそと店内を伺つていたアウダーの発した言葉がこれだった。

普段は暇なはずの時間帯なのに、どうにも慌しく忙しそうで。こんな時に店内に入ろうものならあの主人の事、きっと自分を従業員のように扱き使うハズだとアウダーは回れ右を選択する。

「右に回りますか、はい、だ」

「えへ、なんでだよ？　いいじゃん、いい匂いもしてないよー。」

漂う料理の匂いに、鼻をひくひくさせながら文句を言つ出すダメ。

何だからんだ言いながらも奮ぢ盛りである。食べる気満々であった。

「……おごご！」

お前はさつき何と言つた、と突つ込みを入れようかと思つたが、大人気ないと考えて、アウダーは話を逸らす事にした。

「ゲフングエフン。いや、どうにも満席みたいだ。この通りをもう少し先に行けば、別の店がある。そこにしよう。そうしよう」

「あ、待つてよー！」

(しつかし、何だつてんだか。この感じは)

何やら非常に浮ついた雰囲気の城下。

そこかしこで交わされる人々の会話に耳を傾ければお祭りだの勇者様だの。

「……面倒な事になりそうだ」

そう呴いたアウダーの言葉は「早く行こう！」と急かすダイには聞こえていなかつた。

ロモス王国の南東部には、巨大な森がある。

過去、何人もの人間がこの森へと入り、無事に森を抜けた者、戻ってきた者は数少ない。

日の光を遮るかのように並び立つ無数の大樹。

昼間であつても光の差さないその地に、鬱蒼と覆い茂る草木は人々に不安と恐怖を与え、そこに棲む無数の魔物の存在もあって、いつしか人々はこの森を“迷いの森”と呼ぶようになった。

今では近隣の村に住む住民達や、一部の人間を除いて、進んでこの場所へ近づこうとする者はいない。

この森に棲む魔物に対して幾度か討伐隊を求める声も上がつたが、そこに棲む魔物が森を出て人々を襲う事は稀であったため、王家はその対応を監視の強化と国民への注意を促す程度に留めていた。

魔王ハドラーの起こした戦乱により多くの兵の命が失われた事で、新たに再編された兵团には若年の者が目立ち、討伐隊を組めるほどの余裕も無ければ、近隣の村々へ配備する兵力も足りなかつた。これはロモス以外の国にも言える事であったが、それが実情であった。

そんな迷いの森の奥深くに、人知れず造られた洞窟があつた。
咆哮を上げる巨大な魔物の顔を思わせる入り口を構えた不気味な

洞窟である。

「ふん、あのような奴が“獣王”を名乗るだと……」

その奥深く、暗闇の中で蠢く巨大な影。

影は洞窟の外へと向かい、ゆっくりと動き出す。

そして、差し込む僅かな光にその影の姿が露になった。

丸太のような巨大な四肢を持った牛頭の、伝説にあるミノタウロスを思わせる巨漢の魔物。

全身を覆うプレー・メイルが、日の光を反射して不気味に輝いていた。

右手に身の丈はある巨大な戦斧を持ち、左手には一つ目の魔物“悪魔の目玉”が握られている。

「見ぐびりおつて……百獣魔団を統べるのはこの俺様こそが、百獸將軍ザングレイこそ　ふさわしい！！」

苛立ちと共に、悪魔の目玉を地面に叩きつけ、手にした巨大な戦斧を力任せに振るつ。

その巨腕によって巻き起こされた風圧に、周辺の木々が次々と砕けへし折れていく。

その光景に満足したのか、落ち着きを取り戻したザングレイは、手にした戦斧を足元に転がる瀕死の悪魔の目玉に叩きつけると止めを刺す。

「手緩いのだ。人間などに何を恐れるものがあるか。時間など『えずこさつこと叩き潰してしまえばいい』

これから始まる事を想像し、愉悦に歪められたその表情は　邪悪。

「手柄だ。手柄さえ立ててしまえば誰も文句は言わん

ザングレイが視線を向けた先、その方向には活気に賑わうロモス城があった。

御前試合

「どうして分かってくれないんだりつ……」

宿の窓から見える町の光景、そこで賑わう人々の姿に反して、それを眺めるダイの表情からは昼間の明るさが影を潜めていた。

ただ、悲しい。

この城下町全体に広がる賑わいの原因を知ってしまったダイに浮かれる事など出来るはずが無かつた。

デルムリン島の凶悪な魔物を成敗し、希少な魔物を捕らえて戻つた勇者を称えるために、今宵国を挙げての大がかりな宴が開かれるところ。

昼食を取るために立ち寄った食堂で、その話を聞いた時、思わずダイは叫んでいた。

『あいつらは勇者様なんかじゃない!』

どうして皆が悪者にされてしまうのか。何も悪い事なんてしていない。それに

「あいつらは『メちゃんを連れ去つた! 勇者様を語る偽者なのに……』

「お前も、あいつらを勇者だと勘違いしたんだりつへ、つまりは、そーゆーじつた」

ダイの弦きに答えたのは、両手に持つたトレーの上に食事を乗せてやつて来たアウダーだった。

「ほれ、お前の分」

「……うん、ありがと」

食堂でのダイの発言は、勇者様と盛り上がりをもつていた周りの客達に冷水を浴びせた様なもの。

とても落ち着いて昼食をとれる様な雰囲気ではなくなってしまったのだ。

アウダーはダイを連れて自分が泊っていた宿へと場所を移していった。

ベッドに腰かけ、沈んだ様子で黙々と食事をするダイ。

(空氣読め、ってのも……無理な話だわな)

アウダーがプラスから聞いたところでは、ダイはまだ十一歳ぐらい。普通であれば、まだまだ遊び盛りである。

逆に、これぐらいの歳で周りの空氣を読む事に長けていれば、それはそれで嫌な子供だ、とも思つ。

これが子供を心配する父親の気分か、とも思つたが、逆算すれば九歳差。あり得なくなるが、お兄さんが妥当か、と考え直す。

「いや、そんな事はどうでもいい。ダイ、食いながらでいい。ちゃんと確認しておきたい事がある」

「え?」

「お前、俺がいなかつたら、『ゴメちゃん』だったか? どうやって助ける気だつたんだ?」

その質問に、ダイは食事の手を止めて考え始めた。

「ん~。最初はさ、島の皆の力を借りて、あの偽物達をやっつけてゴメちゃんを取り戻そう、って考えてたんだけど」

それができれば一番手っ取り早かったのだが、今となつてはゴメちゃんは国王の元に、偽物達はお城の中。

「だから……夜にでもお城に忍び込んで って、アウダー？」

「……分かった。もういい」

ひょっとしたらと、淡い期待を込めて聞いてみたが、ビリやうりダメも行き当たりばったり しかも過激派だったと分かり、眉間に抑えるアウダー。

「お前はその歳で手配書に載るつもりか」

「……何だよ、だつたらアウダーには何か良い手があるの?..」

「まあ、あるっちゃある。でもな、そのプランAは、できれば使いたくない手だし時間もかかる。そこで、プランBを考えたんだが…」

…

やつ言ひと、アウダーは懐から一枚の紙を取り出してダイに渡した。

「ナイスなタイミングだったよ。事が上手く進めば、王様に直談判だってできる。したかないが。そこでだ、そのゴメちゃんつてのと、

お前は親友なんだよな？ 意思の疎通はできるのか？「

「そりゃあやつね。おれどゴメちゃんは小さこ頃からずっと一緒にいたんだ」

「ゴメちゃんだけじゃない、島の皆だってそうだ。

用紙を食い入るように見つめながら、諂らしげに語るダイ。だつたらイケるかと、アウダーはプランBを実行する事に決めた。

「よし。ならプランBで行く。わざとメシを食つて出かけねがつて、まだ見てるのか？」

食事に手も付けず、難しい表情のまま、じつと用紙を見つめ続けているダイ。

何か問題でもあったのか、そのままようとしたアウダーに、ダイはやっと用紙を差し出すと、ただ一言だけを告げた。

「字読めない」

「……これが終わったら教えてやるつか？」

「勉強嫌い」

アウダー の じづべき

>

でこひん れんだ
ウメボシ の けい
ななねんじゅ

ダイは、ないてあやまつた！

第3話 御前試合

シナナ王の冒険者好きは周辺国に広まっている程に有名である。彼らの語る冒険譚に一喜一憂し、成果を挙げた者には惜しみない賛辞を与える。

場合によつては、彼らの活動を援助する事すらあつた。
そして、もう一つ。

シナナ王はツワモノ達が大好きであった。
それは、彼の代で、城下町の外れに闘技場を建造した事からもうかがえる。

「王様の思い付きとかでな、ちょくちょく武術大会つてのが開かれんんだと」

大通りを外れ、闘技場へと向かう道には、今日は多くの人々が行き交っている。

その人波の中を、アウダーはダイにプランBの説明をしながら歩

いていた。

「で、だ。それが今日、急遽開かれる事になった。優勝者には賞金一万ゴーラード。賞金の額としては少ないが、急に決まった大会だからな。ま、いろんなモンだろ」

「あのや、それとゴメちゃんを助けるのにどんな関係があるの？」

「今回の大会のお題田は、危険極まる怪物島から神秘の珍獸を捕らえた勇者様にあやかつて、だと。多分、お前のお友達のお披露目も兼ねてるな」

偉い人の考えつてな分かんねえなとアウダーがぼやく。

「ゴメちゃんが！？」

身を乗り出したダイを軽く制して続ける。

「落ち着けよ。話を戻すぞ。副賞の方も面白くてな、俺としてはこっちがおいしいんだが……勇者様直々のご指導をして頂けるんだと。そして、賞金を渡す時には、王様自身が選手に直接手渡しするんだそうだ」

危険を冒してまで、お城に忍び込む必要はないって事だな、ヒアウダーは続けた。

「……へ？ それって！？」

「つまり、優勝すればご指導の名田であいつ等を引っ張り出せる。そして王様にも直接事情を説明する機会を得られる。そうなれば、

あいつらは勇者様から一転してただの強盗だ。証拠云々を言い出だしゃがつたらお前の出番だ。……クックック

驚くぜあいつらと、そう言つたアウダーの口は完全に座つていた。

「……怖いよアウダー」

どう見ても悪者の雰囲気である。

ダイにしてみればゴメの救出こそが第一であり、偽者達への仕置きは二の次であつたのだが。許す許さないは別としても、さすがにアウダーの様子を見て偽者達の末路が哀れに思えてきた。

「大声でお友達の名を呼んでやれ。嘘かどうかは、それで分かるだろ?」

一人が到着したのは受付終了の寸前であった。予想よりも多く出場者が集まつたので早めに打ち切りとしていたらしい。

「只今を持ちまして受付を終了致します!」

どうにか間に合つたものの、直に試合が始まるとの事。

「じゃ、手筈通りにな。観客席で大人しく見ていろよ?」

そうダイに告げると、アウダーは急ぎ控室へと向かつて行く。その子脇には、ここに来る途中で買った荷物が抱えられていた。

登録には偽名を使い、試合では変装もするとの事。

本名を名乗つて偽物達に警戒されたくない、との事だつたが、商店で品を選んでいた時のアウダーの様子を思い出したダイには随分とノリノリに見えた。

「大丈夫かな？」

やはり自分の手でとこう思ひは消せず、ダイも出場しようとしたのだが結果は不可。

受付の担当者が見たところ、同年代の子らに比べて鍛えている様だが、誰がどう見ても子供である。

シナナ王は純粋に戦いを通じて切磋琢磨するツワモノ達の姿が観たいのであって、血生臭い殺し合いを觀たいわけではない。

そのため、出場の際には幾つもの規定が設けられていたのだが、ダイはその一つである年齢制限に引っ掛けたのである。

例外として、シナナ自身が力量を認めて許可を出せば子供でも出場は可能であつたが今回ばかりはどうしようもない。

「ちえつ。なんだよ、子供子供つて。でも」

子供扱いされるのは嬉しくないが、今回に限つては良しとしよう。小柄な体格を生かし、人混みの間を器用にすり抜ける。それを続けてどうにか最前列に近い場所に辿り着いたダイは、この時に限つては自分が小柄な子供である事に感謝した。

円形に形作られた石畳の舞台の上では、今は魔法使いと戦士が戦つてゐる。

火炎呪文の炎を掻い潜り、手にした棍棒の一撃を繰り出す戦士。

その攻撃を読んでいたのか、危な氣なくその一撃を避けた魔法使いが幻惑呪文を唱えて、戦士の動きをかく乱する。

「うひやー、うひじいなー！ つて、駄目だ駄目だーー！」

思わずその戦いに見とれてしまつたダイであつたが、目的を思い出して会場全体に目を向ける。

「……あそこかな」

すると、見晴らしの良い場所に造られた、いかにもな特等席に、温厚そうな恰幅の良い男性と、その脇に控える兵士達の姿が確認できた。

きっとあれが王様なのだろう。ならゴメちゃんはどこにと、目を凝らして見るが、それらしい姿は見付けられない。偽物達の姿も。いつなると、アウダーの言つていたプランBが途端に疑わしくなつてくれる。

お城に忍び込んだ方が良かつたのではないか、使いたくない手と言つていたが、そちらの方が確実だったのではないか、と。

「そもそも、優勝できるのかな？」

そして、ダイの最大の懸念はこれだった。

プランBはアウダーが優勝する事が前提。

確かに、自分の全力の一撃を、片手で受け止められるほどには強いのだろうが、実際にアウダーの戦いを見た事は無い。

あの時にも、直後に見たのは足を押されて蹲つた姿だ。

舞台では小柄な武道家が大柄な男を場外へ蹴り飛ばして勝ち名乗りを受けている。

『急に決まった大会だからな、出場する奴なんて地元の力自慢ぐら

いだろ？ 大丈夫大丈夫、まつかせなさい』

ひらひらと手を振りながら、行つてくるぜー、と軽い調子で控室へと向かつたアウダーの姿を思い出し、ダイは思った。

「……駄目かもしない」

それは、小さな呟きであつたのだが、隣にいた青年には聞こえていたようだ。その不安げな様子が気になつたのであるうか。

「君の知り合いも出場しているのかな？」

「え？ あ、ハ、はい！」

見知らぬ相手に突然話しかけられた事で、ダイは思わず上ずつた声を出してしまつ。

その恥ずかしさで赤面するダイ。

「ああ、すまないね。驚かせたかな？」

青年は謝罪すると、その視線を舞台の上へと向けた。

「私の知り合いも出場していくてね。全く、少しほ自分の立場と言つモノを自覚して欲しいのだが」

やれやれと、肩を竦めた青年の視線を追えば、舞台の上にはアイマスクを付けた栗色の髪の少女と覆面マントで全身を覆つたいかに

も怪しい男が対峙していた。

何やら言い争っているのか。

両手で自分の身体を抱きしめる少女と、両手をワキワキと握りへ
動かす覆面男。

『さあ、この試合が予選最終戦となります。本大会の紅一点！　え
へ、「愛と正義と勇気の使者、水と知性の美少女戦士セーラーレオ
ナ！」…………わざと衣装がドキドキだーーー！』

「…………レオナ様…………」

そのアナウンスに、思わずこめかみを押されて苦悩する青年。

『対するは、「世界の美女は俺のモノ、文句ある奴アかかってこい
！　世紀の恋泥棒カンダタ！！！」…………おおーっと、会場中から大ブ
ーイングです！　私としては、セーラーレオナに一言イヤンとでも
言わせてくればオッケーですーーー！』

カンダタとは、ダイが事前にアウダーから教えられていた偽名で
あつた。

どのような変装で登場するのかと思えば、不審者以外の何物でも
ない姿。

おまけに何なのだろう、恋泥棒とは。意味が分からぬ。

「…………やつぱり駄目だ…………」

何やつてるんだよ、アウダー。

情けな過ぎても涙が出る事を、ダイは十一歳の若さで知った。
ダイは、大人の階段を一つ上った。

ちなみに、この試合の勝者はアウダーであった。

セーラーレオナがイヤンと言ったのかどうかは、彼女のプライバシーのため、彼が一部の観客から熱狂と共にその勝利を称えられた事から察して頂きたい。

ただ、舞台に多大なる被害の爪痕が残された事を記しておく。

さて、急遽開催されたわりに、出場選手のレベルは高かったのだが、人數という点ではそれ程でもなく。

相手をおちよくるような、ぐだぐだの戦いを見せて勝ち進んだアウダーは、早くも準決勝に進出となつた。

待ち人であつたセーラーレオナが敗退した時点で、青年 バロンが観客席に居る意味は無くなつたのだが、心の傷が大きかつたのか、試合が終わつても彼女はまだここには来ない。

試合が終わるまで待つていろいろと言われていたバロンは、ならばとこのまま試合を観戦する事にしていた。

彼女の立場を考えれば、試合中の出来事とはいえ、あのような目にあわせたカンダタなる者を許すわけにはいかないのだが。

隣にいる少年の漏らした名前と、先程のふざけた試合内容から、カンダタの中の人正体に気付いたバロンは、この事について考える事を放棄した。

自分は出場する事を止めた。聞かなかつたのはレオナであるし、試合中に調子に乗つたのはあの馬鹿だ。

どちらも自業自得、後は当人同士で何とかしてくれ、と言うのがバロンの偽らざる本音だつた。

彼女と“悪友”的いざこざに、毎度の如く巻き込まれるのだけはもう勘弁して欲しかつたのだ。

隣に座る少年も「……大人つて……」と咳きながら頭を押さえて

いる。

君も苦労してるんだなと、微妙な親近感を覚えたが、それよりもバロンには氣になる事があった。

『さあ、皆さまー。今回の武術大会もいよいよ大詰め、準決勝です！』

ロモス王が、勇者なる者達を誇らしげに紹介しているが、彼らには正直興味は無い。

また、ゴールデンメタルスライムなる希少なモンスターを、皆の前に紹介しているがこれも同じ。

隣に座る少年が、それを見て「ゴメちゃんツ！」と叫んだのも気にはなつたが、もつと興味を引かれる者がいたのだ。

『この四名、いずれも劣らぬ強豪ばかり！』

パワー＆テクニック！！ 格闘士ゴメス！

旋風の如き剣の使い手！騎士バロリア！

強いのか弱いのか！？ 覆面マントの怪人カンダタ！

そう、その名は

『立ち塞がつた相手は全てが一撃、全てが秒殺！！ 厄倒的な強さを見せた無名の剣士！』

戦士ヒュンケル！

試し合い

これまでトーナメント形式で行われていた各試合であったが、急遽準決勝での対戦相手は抽選によって決定される事となつた。

運営側としては、これまでの試合で損傷した舞台の修繕を行うための時間稼ぎであったのだが、この展開は観客達に好意的に受け止められている。

「次の大会からも取り入れようかの」

「このシナナ何気ない一言で、次の大会からは準決勝で一度対戦相手の組み換えを行うといつイベントが追加される事が決定した。

さて、その抽選の結果である。

第一試合はゴメス対バロリア、第二試合がカンダタ（アウダー）対ヒュンケルとなつた。

「舞台の修繕が終わるまで、各選手には一度休憩に入つて頂きます

「それって、終わるのにどれくらい掛かりそう？」

「そうですね、十五分から二十分もあれば終わるかと」

「そこ」から一試合か。結構な時間だな

折角空いた時間である。ならばと、アウダーはこの時間を使って

“おかんむりなお姫様”の機嫌を取つておく事に決めた。

レオナとは実に数年振りの再会だったが、まあ随分と成長したもんだと、先の試合でのアレやらコレやらを思い浮かべる。

幸いにも覆面のおかげか、係員達からは次の試合に備えて集中しているようにしか見えていない。

もつとも、先の試合の内容が内容だけに、あえてこの怪しい覆面男に話しかけるような係員はいなかつた。

「……逝くか……」

アウダーは人体の神秘、月田の流れつてすげーなど感心しながら、鬼が待つであろう控室へと向かうこととした。

係員達は皆作業に駆り出されているのか、通路には他に人影は見当たらない。

「ああそうだ。そろそろメルルに手紙でも書くか

レオナの成長のついでという訳でもなかつたが、アウダーは最近全く連絡を取っていない祖母と妹の事を思い出す。
この薄情者が、と眦を釣り上げるナバラの姿が容易に想像できて少しへこむ。

「……今更つて感じもするしなあ。お元気ですか、つてのもなんだかなあ」

そんな風にとりとめの無い事を考えていた為か。

通路を右へ曲がろうとしたその時、アウダーは死角から出てきた人影に気付くのが遅れてしまった。

「あー？」

咄嗟の事であつたが身体が反応した。

倒れこむように重心を左へと傾けながら、右足で通路の壁を蹴り

つける。

「ゴッ」という音の後に、何事もなかつたかのようにその場に立つ若い男と、向こう側の壁に背中からへばり付いたアウダー。

「ああ、悪……いや、すいません、まづつとしていました」

「……いや

自分の不注意だった事もあり、アウダーは口調を変えて頭を下げた。相手を見れば、少しくすんだ銀髪の鋭い眼つきをした青年だった。

落ち着いた佇まいでありながら、どこか刃物の鋭さを感じさせる特徴的な雰囲気に、確かにヒュンケルと言つ名だつたかとアウダーは思い出す。

(まるで剣だな。鞘に収めてはいるがいつでも抜ける、って感じの)

試合を観戦していた時から頭一つ飛び抜けた相手だとは思つていたが、こつして間近で相対して判る事もある。

明らかに他の参加者とは頭一つ違ひではない、レベルが違う、と。

「ええっと、確かヒュンケルさんでしたっけ？ 次の試合の」

「……ああ

それだけであった。

他には特に何を言つでもなく。

ただじつと、ヒュンケルはその鋭い視線をアウダーに向けている。はつきり言つて辛い。間が持たない。ぶっちゃけてしまふと視線

が怖い。

そんなに怒らせるような事をしたか、と内心焦るアウダーであつたが心当たりは特にはない。

「……ひょっとしてセーラーレオナ関係の方?」

あるとすればこれぐらいだったのだが、ヒュンケルからは特に反応はない。

さてどうするかと視線を泳がせるアウダー。

そこでふと目を引いたのは、無骨と言つべきか不気味と言つべきか、ヒュンケルの肩から鎖で吊り下げるられた巨大な剣であった。正しくは、巨大な鞘に納められた剣である。

目立つ事この上ないのに今の今まで気が付かなかつたのは、それだけヒュンケル自身の存在感が大きかつたためか。

「魔剣か何か……か? 随分と物々しいと言つか禍々しいと つて違う違う! いやー 素敵な剣ですね!」

思わず口に出てしまつた本音を必死に誤魔化そうとするアウダー。これまでヒュンケルが行つた試合では、彼は全て徒手空拳のままで勝利していた。

ここで下手に怒らせでもして、こんな見るからに物騒な魔剣なんて使われてはたまらない。見苦しいまでに必死であった。

誰だ、ご近所力自慢大会なんて言つたのは、と。あの時の自分を殴つてやりたくなつた程である。

「うん。お互い怪我をしないように、くれぐれも、気を付けて、空氣を読みつつ、穏やかに頑張ろう!」

これはプランCかDが必要になりそだ、アウダーは計画の変

更を考慮し始めた。

思つた以上に時間を食つた事もあり、そろそろ“おかんむりな姫”から“怒れる鬼姫”にレベルアップしたかもしれないレオナの元へと向かうべく回れ右。

遠回りになるが、一刻も早くこの微妙に緊張した空氣から逃れたかったのだ。

「……本氣ではなかつた、そつ言つ事か」

「はい？」

突然の事であつた。

今まで相づち程度の反応しか返さなかつたヒュンケルが初めて発した言葉である。

何かあるのかとアウダーが振り返ろうとして

『……ひづ』

首筋に走るチリチリとした感覚に従いその場から飛び退いた。

ザツと、何かが切り裂かれる音。

通路の小窓から差し込む光に照らされて輝く刀身。

一人の間にゅっくりと落ちる切り裂かれたアウダーのマント。

素早く体制を立て直したアウダーは、腰に差した剣に触れながらヒュンケルを睨みつけた。

直前に、ヒュンケルが何かを言つていたようだがそんな事はもはやどうでもいい。

「……どうごうつもりだこの野郎」

「気配を感じ今のを避ける、か。成程、やはりただの道化ではない」

「聞けよ人の話」

ヒュンケルはそれには答えず、抜き放つた剣の切っ先をアウダーに突き付ける。

その表情が、なぜか微妙に楽しそうにアウダーには見えた。

(ドウガ、この野郎)

喉元まで出かかった言葉を何とか堪える。

「あんな、こんな狭いトコでおっ始めんでもじばらくすれば試合でやり合いつてコト分つてる? 場外乱闘は失格なんだぜ?」

軽口を叩きつつも、アウダーは咄嗟に飛び退いた分だけ開いてしまった間合いを確認する。

互いに一步踏み込んだとしても、おそらくは後一步足りない、といったところか。

一步踏み込み先を取るか、一步に留めて後の先を取るか。
相手は既に抜き身、こちらの剣は鞘の中。

(……って、何でやり合つ気になつてんだ俺。あいつの事情は知らないが、俺にはこんな場所でやり合つ理由はない)

「あるな」

いきなり斬りつけられて、それを笑つて済ませられるほど人間ができるとは思っていない。

いつぞ大声でも出して人を集めてヒュンケルを失格にしてやろうかとも考える。

「構わんさ。」ここで確認できるのであればな。この後の試合にはもう拘るほどの意味は無くなつた

構わんつて、おいおいマジですか」の野郎」

「……フツ。ああ、マジだ

その瞬間、アウターはピュンケルが確かに微笑んだのを見た。
そして、自分の想定が甘かつた事を痛感した。

「ツ！？」早ツ

仮定していた互いの一歩。

ヒュンケルの踏み込みは、その前提を無意味にした。既にヒュンケルは間合いの中。諸手の上段。

反擊無理。

ならばと、袈裟掛けに振り下ろされる刃を、逆手で鞘」と引

ガギンという甲高い音と共に左腕に奔る衝撃。

「うめ！」

打ち合つた互いの剣を支点として、アウダーは勢いのままに身体を流すと、握りしめた右拳を体勢の崩れたヒュンケル田掛けて突き

出した。

この一撃で倒せるとは思っていない。

ただ、少なくとも仕切り直す程度の余裕は出来るとアウダーは考えていた。

だが

「……嬉しそうだなオイ」

「そうか？」

「鏡見ろ鏡」

眼前の相手を打ち抜くはずの拳は、そのヒュンケルの左手に受け止められていた。

剣を持ったアウダーの左手は痺れたまま動かない。

右手はヒュンケルの左手で掌握されている。

そのヒュンケルの右手には剣が握られ、振るも払つも思ひがまま。

いつなつてしまつては、誰が見ても勝敗は明らかである。

「……はあ……。で？ 何が目的なわけ？」

観念した、と言つよりも自棄になつたと言つべきか。

ヒュンケルがアウダーの右手を離すと、アウダーは溜息を吐いてその場に座り込んだ。

たつた今、この場で斬り合いをやらかしていたとは思えないほどのだらけつぱりである。

「全力かどうかは知らないが、少なくとも殺る気ではなかつただろ

「どうしてそう思つ?」

ヒュンケルは剣を鞘に収めながら問いかける。
アウダーはヒュンケルの雰囲気が、僅かではあるが和らいでいる
様に感じていた。

「露骨な不意打ちもそうだがあの上段だ。あそこで突きなら終わつ
てた」

ゆづくつだが、痺れが抜け始めた左腕をさすりながら答える。
「……そつか」

そう呟いたヒュンケルは確かに嬉しそうであった。
表情に出ている訳では無く雰囲気が、である。
例えるならば、提出した課題で満点を取った生徒を褒める教師と
言つた感じであろうか。

ふと、アウダーは教師と言えばあの師弟は今頃何をしているのか
ねど、どうでもいい事を考える。

「あ～あ、負けだ負け。もう次の試合はする意味が無くなつちまつ
たな」

握り、開き。

左腕の感覚が戻っている事を確認しながら立ちあがったアウダー
は、そのままその場から立ち去るとして

「所詮不意打ちにしか過ぎん」

ヒュンケルの言葉に足を止めた。

「眞面目に戦う気となつたお前と手合わせをしてみたい。田舎と言つたな？ ならば次の試合で答えよう」

「……意外と勿体ぶるヤツなのな、お前つて。そう言わると氣になつて仕方がない。負けても文句言つなんよ」

「期待しよう」

それに応えるかのように、アウダーは右手を上げてひらひらと振つてみせた。

「カンダタ、と言つたか。あの男……」

アウダーの姿が通路の奥へと消えた頃、ヒュンケルは己の左手を見つめていた。

未だ痺れの残るその感触に、思わず笑みを浮かべる。

自分の持つ剣を魔剣と見抜いたのは、武器に対しても多少見る目があれば分かる事。それは驚愕には値しない。

注目したのは通路の角でぶつかりかけた瞬間に見せたあの動き。偶然で出来る動きではない。

しかし、偶然かもしれない。
だから試してみたくなつた。

乱暴な手段であつた事は認めるが、収穫は大きい。

『それでは、両選手入場です!』

歓声が聞こえる。

まだ多少の時間はあつたと思うが、どうやら少し早めに試合が始まるとみえた。

確かにゴメスといつ巨漢と疾風と称される騎士の試合だったと思いつ出す。

「組技を重視したレスリングか。対人技術として興味深い」

準決勝第一試合開始。舞台では、ゴメスとバロリアの試合が始まっていた。

第4話 試し合い

「そんな小娘の言ひ事を信じるとなおしゃるのですか、王よ!」

「そ、そうですわ! 私達はこの國の人達の事を思つてあの危険極まりない怪物島へ赴いたのですよ!.. そんなどこの誰とも知れな小娘の言ひ事なんて!」

「言つてくれるわね!、まあいいわ。それなら、貴方達は彼を見て

もそんな事を言えるのかしりっ?」

「彼…………？ まさか！？」

「「ゴメスちゃんを返してもいいぞー、偽物め！！」

「ゴメスが繰り出した必殺技“双腕螺旋独楽”が、振り下ろされた騎士バロリアの剣を打ち碎く。

その光景に観客達が沸き上がる中で、でろりんはこの場をびりゅうて切り抜けるかを考えていた。

所詮は地元の力自慢大会だと、高をくくっていたのはアウダーだけではなく、でろりん達も同様の事。

自分達がいわゆる小物、小悪党だという自覚はあったが、それでも並の冒険者達よりも腕は立つという自負はあった。

伊達や酔狂で冒険者をやつしているわけでは無いのだ、と。だからこそ、優勝者への副賞“勇者直々の指導”的件を受け入れたし、こつして堂々と觀衆の前に出る事も決めた。

それが過ちだったのか。

調子に乗り過ぎていたのか。自重するべきだったのか。

『準決勝第一試合、その勝者はゴメス！』

興奮に沸き立つ観客達の歓声が、今となつては遠くに聞こえる。思えば、万事が遠く行き過ぎていたのだ。

「あ、そうそう。こう見えてもね、一応あたしつて王女なの。パパ二力の。ごめんね~、タダの小娘じゃなくつて」

「やり、と意地悪く笑う少女。

でろりんの横では顔を真っ青にしたずるぼん達が、三人抱き合つ
ようにして震えていた。

「ね、ね、バロン。あたし小娘つて言われちゃつたわ。失礼な話よ

「……自重なさい。全く」

「これほんとうに話題の事か。説明をしてもらえるか、でろりんよ」

勇者様と呼ばれ調子に乗ってしまっていた。舞い上がっていた。
さつ もと貰うモノを貰つてとんずらしておけば良かつたのだ。
でろりんがどれだけ思つたところで、現実は変わらない。

「ゴメちゃんーん！！」

「シーランド」

「人間と同じですよレオナ様。魔物とは言え全てが悪、というモノでもありません。この辺りの成り立ちは以前お教えしたかと思いま
すが」

「そう? あ、ほら、次の試合よ。アウダーが出てきた」

どこからだ、一体何処からおかしくなったのだろう。

試合の最中、この貴賓席に突如現れた少女のせいなのか？

デルムリン島で会った小僧 ダイと、共に現れたこの長髪の男のせいなのか？

そもそも、どうしてあの小僧がここにいるのか？

一つに纏まらない思考に、ぐにゅうと歪む視界。

涙を流してダイの元へと飛び込む「ホールデンメタルスライム」を呆然と眺めながら、ドロリんは膝をつき頭を垂れた。

「説明してもらおうかの、ドロリんよ」

周りを兵士達に囲まれて、逃げる事も出来なくなつたドロリん達。

「……はい……」

シナナ王に促されると、ゆっくりとではあったがこれまでの経緯を、デルムリン島での出来事を語り始めた。

報酬に目がくらんだ事、ダイを騙した事、デルムリン島の魔物達は凶悪な魔物などでは無かつた事。

そうして、でろりんがその全てを語り終えた時、シナナ王は眉間にしわを寄せながら、ひどく疲れた様子で溜息を一つ吐いた。

「……それでは、そなただけを責めるわけにはいくまい。物珍しい、心躍るような冒険譚が聞きたいが故にあの手配書を出したのはこのシナナ。金が人の目を曇らせる事を知つていながら、まったく浅はかよな」

そう言つて、シナナ王はダイの前へ立つと、その膝を折つた。

一介の子供を前に王が膝を着く。その光景に、周囲の兵士や家臣達がざわめく。

その喧騒を一喝して黙らせると、シナナは今回の一連の騒動の全ての責は自分にあるとして、ダイやゴメに頭を下げて詫びた。

「あつちは何とかなりそつだな。あとで礼を言つておくか

アウダーが優勝出来なかつた場合を想定して備えたのがプランC “騒ぎを起こしてその間にやつてやれ”である。

ダイが当初考えていた物と同じ力業であり、失敗すれば人生がゲームオーバーという実にハイリスクなものであつた。

ヒュンケルの存在によつてこれを実行するのもやむなしかと思つた時、そこで思い付いたのがプランAの変法であるプランD “他力本願大作戦”。

つまり、レオナの立場を利用して彼女にダイを連れて直接ロモス王と話を付けてもらえば俺は楽ができる、といつ実に素晴らしいモノであつた。

どうしてここに、海を隔てた向こうの国、パプニカの王女がいるのかはこの際問題ではない。この幸運を、日頃の行いの賜物だと思う事にする。

彼女の性格からして、眞実を話せばノリノリでやつてくれるであろう事は容易に想像できた。

一杯食わせてくれたでろりん達に物理的な報復が行えなくなつたのは残念であつたが、現状でこれ以上の代案は思いつかないのでは仕方が無い。

あとは成り行きに任せただと思う事にして、アウダーはこれから迎えるヒュンケルとの試合に意識を集中させる事にした。

『カンダタ選手、ヒュンケル選手、舞台へ!』

そのアナウンスに従い舞台へと上がる。

「来たか」

ヒュンケルは剣を抜き放ち、魔剣の鞘を舞台上に突き立てる。静かに開始の合図を待つ。

「負けっぱなしの悔しいからな」

アウダーは覆面マントに手を伸ばすと、高かつたんだよなコレ、と咳きながら足下へと脱ぎ捨てた。

「……若いな」

その素顔を見たヒュンケルが、少し意外そうに咳いた。

「歳は同じぐらいだろ？」

お互い様だ。そう言って腰に差した剣へと手を伸ばす。

『それでは、只今より準決勝第一試合』

「これで勝った方が2ポイントってのはどうだ？ ちなみにせつものは1ポイント」

「フツ、いいだろ？」

『始めツ！』

開始の合図と共に、ヒュンケルが踏み込もうとした時であった。

突如、黒い影がヒュンケルの目前に広がり視界を覆つ。それが何かと理解するより早く、閃光が影を貫いた。

反射的に身体を逸らす。

閃光がヒュンケルの肩を掠めて舞台へと突き刺さる。

「^{ギラ}閃熱呪文か！」

「避けるかよ！」

風穴を開けて燃え上がる覆面マントの向こうでは、ヒュンケルに向けてその手をかざすアウダーの姿。

「魔法使いか！」

「^{ギラ}閃熱呪文！」

続けて放たれる閃光。
しかし

「甘い」

出所さえ分つてしまえば、直線の攻撃であるギラを避ける事はヒュンケルにとつては造作もない。

矢継ぎ早に放たれる閃光の間をすり抜けると、たちまちの内にその間合いを詰めて見せた。

そうしていよいよ自分の間合いとなつたところで ヒュンケルはアウダーが笑っている事に気が付いた。

「お前もな ボミオス」

その瞬間、ヒュンケルは全身に呑みつけられるような圧迫感を感じ、踏み込みの勢いを失つてしまつ。

「ツー？ ……これは……」

「**ボニオス**加压呪文。足止めぐらいにしか使い道が無い、ってんで廃れた呪文なんだが 効果はあつたな！」

アウダーは、じいじとばかりに動きの鈍つたヒュンケルを攻め立てた。

頭部目掛けて放たれたアウダーの回し蹴り。身体の違和感に慣れないとヒュンケルの髪をかすめる。

ガラ空きの背中を見せる形となつたアウダーへ、逃さぬとばかりにヒュンケルが刺突を繰り出す。

その一撃を、アウダーは体勢が崩れる流れに逆らわず、そのまましゃがみ込むことで回避した。

お返しにと、背後に立つヒュンケルの足首を刈り取る勢いで足払いを仕掛けたアウダーだが、バックステップで回避される。舌打ちと共にその場から飛び退いたが、ヒュンケルはそこで追撃はせず、アウダーが体勢を整えるのを待つていた。

「……効いてない？」

「いや、効いているわ。困惑いこそしたが 慣れた」

「……慣れるとかそーゆー問題じやないんだけどな

開始の合図から僅かな時間。その間に繰り広げられたこの一連の

流れを食い入るように見つめていた観客達から盛大なまでの歓声が上る。

それは貴賓席から観戦していたダイ達も同じ。

でろりん達に至っては、口を開けたまま呆然としている。そんな皆に共通する感情は、ただただ驚愕と感嘆の念であった。

「相変わらず、だな。やる事がセコイと言つかいやらしこと言つか」

そんな中で、バロンだけは渋い表情で試合を観ている。

「ちょっと、一人だけ分つてるような顔をしてないでちやんと説明をしなさいよ」

そのどこか呆れを含んだ様子の眩きに、ムッとした様子でレオナが反応した。

ダイは頭の上にゴメを乗せ、シナナの横で「すつげーすつげー」と大はしゃぎ中である。

「あの変装自体が既に仕込みだったと言つ事です。後は『自分で推察しなさい』これも勉強です」

「むう。ま、いいけど。でもどうしてそんなに不機嫌そうなの?」

「……修行時代の事です。アレと似たような手で負けた事がありましてね」

「これがお前の戦い方か?」

「卑怯者め？」

「いや、面白い」

そう言つて、今度はヒュンケルから仕掛けた。それは威力よりも速度を重視した疾風の連撃。その連撃を、まさしく紙一重で回避するアウダー。衣服には無数の切れ目が入り、血が滲んでいる個所もある。慣れたとは、どうやら本当の事らしい。とんでもねえなと愚痴をこぼす。

「剣は抜かないのか？」

「ならそつをせてもいいつー！」

そう言つて腰の剣に手を伸ばしたアウダー。そのまま一気に抜き放つとヒュンケル目掛けて 投げつけた。

「何ー？」

その予想外の行動に対応するため、僅かではあつたがヒュンケルの連撃の手が緩む。払うか、避けるかの僅かの逡巡。

「爆裂呪文！」

至近距離から放たれたイオによる爆発が、一人をまとめて吹き飛ばした。

直撃ではなかつたが、少なくはないダメージに、吹き飛ばされたヒュンケルの表情が歪む。

(思ひ切つた事をするー。)

直ぐに立ち上がりうとして、ヒュンケルは自らの異変に気が付いた。

周囲から音が消え、視界の全てを深い霧が覆っている。
その霧の向こうに、ゆらゆらと揺れる無数の影。

「マヌーサかー!？」

「！」答

マヌーサ
幻想呪文。

ヒュンケルの咳きに応えるように、四人のアウダーがヒュンケルを取り囲む。

その手には、投げ放ったはずの剣が握られていた。

四人の剣が、ゆっくりとその切つ先をヒュンケルへと突き付ける。

「行くぜ」

そう宣告して、四方から同時に仕掛けた。

さあ、この攻撃は防げまい、と。

対してヒュンケルは、迫る四本の刃を巧みにさばき続けていたが、徐々にその身に手傷を増やしていく。

実戦と試合の違い。

互いに本気ではあつたが、そこに殺意は無い。
剣から殺氣や殺意と言つたものを感じ取れない以上、視覚に頼らざるを得ず。

その視覚が惑わされている今、ヒュンケルにしてみれば目に見える全てに対応するしかない。

さらに厄介な事は、虚実入り混じった攻撃がどれも鋭く速いと言ふ事。

(全く、意外と義理堅い奴かもしけんな)

そのような状況にあるにも関わらず、ヒュンケルは笑みを浮かべていた。

田ぐらましを用いての不意打ち、呪文による奇襲、誘い搦め手、自らを巻き込んでの自爆まがいの攻撃にこの仕掛け。

卑怯などと言ふ気はない。

自分は言つたのだ。戦う気になつたお前と手合わせしたい、と。そして、一連の流れから、おそらく相手も自分を試していると推察していた。

呪文を見せ、策を見せ、体術を見せ、そして今剣を見せようとしている。

ならば、自分も見せるとしよう。

自ら構えを解いたヒュンケルは、静かにその目を閉じた。

(観念した？　違うー)

こんな程度で觀念するような男かと。

アウダーがその真意に気付いた時は遅かつた。

「そこだ！」

ガギンと甲高く、打ち合つた鋼と鋼の音が響きわたる。

それと同時に消え去る幻。

鍔迫り合いの形となつた二人は、互いに相手を押し切らんと手にした剣に力を込めた。

「心眼を頼りに気配を探れば幻惑呪文などにては惑わされん」

「心眼つて……。つぐづく……何者だお前は」

そうしてせめぎ合っていた両者であったが、膠着した状況に思つ
といひがあつたのか、お互い申し合わせたように距離を開ける。

「次は何を見せる氣だ?」

「残念。小細工のネタはもう切れた。後は 加速呪文!」
ピオリム

アウダーの周囲に風が巻き起つり、淡い光を伴つた魔力がその
身を包む。

「正面からやつ合つだけだ」

「怖いな、まだ手が有りそつだ」

「信じるよ」

「さて、な」

お互に笑う。

「行くぞ、カンダタ!」

「そりゃ偽名」

互いに舞台を蹴り、真っ直ぐにぶつかり合つ。

振り上げられた刃と刃。二人の剣が同時に交差をしあい、まるで

弾かれた様にお互いの位置を田まぐるしく変える。

「俺の名前はアスダーだ！」

速度で勝ったアウダーが繰り出す無数の斬撃を、力と技量で勝るヒュンケルの一撃が押し返す。

観客達はその光景を固唾を飲んで見守っている。
それは、まるで舞踏の様で。

いつしか、場内には澄んだ剣劇の音だけが鳴り響いていた。

しかし、この永劫に続くかと思われた舞踏にも終わりは来る。

バキンと鳴り響く異音。

宙を舞う折れた刃。

額に触れるか、と言つ距離で止められた刃。

「（）まで、か

「ああ。 （）まで、だ」

剣を突き付けたヒュンケル。

折れた剣を捨てて、両手を上げるアウダー。
ピオリムの輝きはどうに失われていた。

明確なまでの勝者と敗者の構図。

その光景にシンと静まり返る場内。

口火を切ったのは、やはりというかアナウンサーの言葉であった。

『一、これは劇的な決着ウ！！ カンダタ選手を破り、決勝に進むのはヒュンケル選手！ 勝者はヒュンケル選手です！！』

パチパチと、誰かの起こした拍手の音が徐々に広がっていく。緊張から興奮へ。沸き上がった歓声が、怒涛の勢いで闘技場内を埋め尽くしていた。

「これで3ポイントだな。次は5ポイントか？」

「イヤミカニの野郎。お前とは金輪際やらねーか。」

舞台上に突き立てた鞘を抜き、剣を收めながら問いかけるヒュンケルに憮然と返すアウダー。

「そう言つた。なかなか楽しかった」

「俺はとてもすじく疲れた」

興奮冷めやらぬ観客達からの称賛の声に、早々と舞台を降りようとするヒュンケル。

それに愛想良く手を振つて応えるアウダーの横を通り過ぎると、そのまま控室へと向かい舞台を後にした。

手を振るのを止め、その背中を暫く見つめていたアウダーもやがて舞台を降りた。

控室への通路への道すがら、貴賓席へとアウダーが顔を向ければ、そこでは笑顔で手を振るレオナとダイの姿。ダイの頭の上には、翼の生えた金色のスライムが乗っている。

その光景に、どうやら事がうまく運んだようだとアウダーは安堵

していた。

「見ての通りだ。安心しろ、無事に片は付いた。後は、ダイ君と彼の友人をテルムリン島に送ればお前の義理は果たせるな」

「ああ、助かつたよ。でろりんどもに何か仕返しをしてやりたくもあるが。どうなつた?」

アウダーが振り返れば、そこには腕を組み氣難しい顔をしたバロンの姿。

何だ悩みか、禿げるが、と軽口を叩くアウダーをバロンは一睨みして黙らせる。

「お前が素直に礼などを言つから驚いただけだ。何を企んでいる?」

「企むつて、お前。そりやちょっとヒドクないか?」

アウダーとバロン。

この二人は少年期を共にパプニカで過ごした昔馴染であり修行仲間でもあった。

神童とうたわれ、優れた賢者として将来を有望されたバロンと、幼いレオナと共ににかと騒ぎを起していたアウダー。

一人の騒動に巻き込まれ続けたバロンは、いつしか周囲から一人のお目付役の様な役割を任せてしまい、気苦労の絶えない日々を送る事となる。

その結果として、いつもして会えばイヤ//の一つや一つ、説教の一つや一つ。今の二人の関係があつた。

「自業自得だ、日頃の行いを恥じる。褒美の撤回と一ヶ月間の無償奉仕だそうだ。そこで落ち着いた。それよりも、お前は自分の心配

をしる。レオナ様は笑っていたが、試合の件をかなり根に持たれている。責任を取れ、だそうだ」

「熨し付けて返す。てかよ、なんでお前らがここに居る……って、いいか別に。で、ビーしたよ。わざわざこりんなトコで」

すわ闇討ちか、と身構えるアウダーを阿呆と一緒に蹴するバロン。

「お前にしては珍しく真面目に戦っていたのでな。おおまかな経緯は聞いたが、らしくないと思つただけだ」

「どつちが？」

「どつちもだ」

突拍子もない話だけどな、アウダーはそう言つて壁にもたれ掛かると、何でもない事のように続けた。

「仲間になれつてさ」

その言葉だけでは特に何の問題も無い。しかし、そのあとに続けられた言葉を、バロンは即座に理解をする事が出来なかつた。

「魔王ハドラーが復活したつてんでな、共に闘える相手を色々と探してたんだと」

あの時、試合を終え舞台を降りようとしたヒュンケルが、アウダーハーの横を通り過ぎた時にこいつ語つた。

『敵は魔王軍。かつてより強大になつた

新生魔王軍だ』

「なんとも……荒唐無稽な話ではある」

「だろ?」

いくらなんでも魔王ハドラーはないだろ? アウダー自身、自分で言つていても胡散臭い事この上ない。

「だが、嘘を吐くな! もうひと度シカの事を言つだらうな」

「……だよなあ。そこそこじつうじつよ?」

そう呴いたアウダーの声色が僅かに変わった事でバロンは気付く。通路の奥へと向けられたその視線。

その視線の先に、こちらに向かつてゆっくりと歩み寄るヒュンケルの姿があった。

「ビリで、ビリヤって知つたのか」

「パブニカの賢者お一人様追加だ。その辺も答えてくれるよな? ヒュンケル」

「オレはその魔王軍にいた」

何でもない事であるかのように、さらつと語つたヒュンケル。間の抜けた表情を晒す二人の横を、実に愉快なものを見たといった様子で通り過ぎて行つた。

「 「 …… 」 」

『 それではッ ! 只今より決勝戦を 』

「 「 …… ハッ ! ? 」 」

会場内に響き渡るそのアナウンスに、一人はよつやく再起動。

「 「 いやいやいやいや待て待て待て待て ! ? 」 」

慌てて会場へと駆け出すアウダーとバロン。

「 …… なんなんだろ ? 」 」

「 ピッ ? 」

「 さあ ? でもあんなに慌てた様子のバロンなんて …… 珍しいものを見たわ 」

その一部始終を偶然にも目撃していたのは貴賓席から降りてきたダイ達であった。

会話の内容までは分らなかつたが、ただならぬ二人の様子に俄然レオナの興味がわいて来る。

「 ほら、追うわよダイくん ! ふふふ、なんだか面白い事でも起きるのかしら ? 」

そう言つてダイの手を取つたレオナは、一人の後を追うべく駆け

出した。

「うわうわうわー!?

突然の事に慌てふためくダイ。
繋がれた手の暖かさと柔らかさ、そしてほのかに感じる少女の香
りに胸が高鳴る。

それが一体何なのか。早まる動機に耳まで赤く。
それでも、ダイは置いてかれまいとレオナの手をしっかりと握り
駆け出していた。

「……ペペペイ〜」

すっかり静かになつた通路には、呆れたような、憐れむよつな生
温かい眼差しをダイ達へと向けた。ゴメだけが残されていた。
器用にも、その翼を両手に見立て、やれやれと表現していくよう
にも見える。

「ペペペイ」

『氣合いを入れたのが、一聲鳴くとゴメもまたダイ達の後を追つた
ために飛び去つて行つた。

そんな自分を、陰からこつそりと血走つた狩人の目で見るぼんが
見つめていた事を、『メは知らない。

「か、可愛すぎるわあのコー、お持ち帰りしたい!…」

「バカ、よせつてのー！」

「『いや、落ち着かんかい！』」

力ずくでもと懲りない彼女と、これ以上問題を起させたまるかと、必死になつて彼女を押さえつけているでろりん達との人知れぬ戦いがあつた事は 割愛する。

第5話 巨獣の影

先の準決勝で繰り広げられた戦いもあり、この決勝は誰もがヒュンケルの圧勝だと予想していた。

しかし、その予想は大きく覆されていた。舞台の上では拳や蹴りを打ち込むヒュンケルと、その一撃を凌いでどうにか組技へ入ろうとするゴメスとの壮絶な格闘戦が行われていたのだ。

「ハアツー！」

「ぐっ、ぬうおおおおー、ぬおりやあああああッー！」

お前の技を一度体験してみたい、ヒュンケルはそう言つてゴメスに格闘戦を提案していたのだ。

攻め立てるヒュンケルと、耐え凌ぐ事で僅かな機会を待つゴメス。相手の攻撃を耐えきった上で勝利する。それがゴメスの求める勝利であり、これまでの試合でもそれを実践し続いている。

見ている観客達もその事が分っているだけに、一方的に見える内容であつてもひょっとして、という期待を抱かざるを得なかつた。事実、何度かゴメスの手はヒュンケルの身体を捕えかけている。

熱狂する観客達から一歩離れ、舞台入口の傍で試合を觀るアウダーラ。

そこには、いつの間にかダイとレオナに加えてでろりん達まで集まっていた。随分と碎けた様子でダイに接するでろりん達に、一体何があつたのかとアウダーはバロンに視線で問いかける。

(どうなつてんだコレ?)

(ダイ君が許した事で罪が軽くなつたのでな)

ちらりとアウダーはでろりん達を見る。

ダイと並び、大口を開けて試合を觀戦しているでろりん。

鼻息荒くヒュンケルの姿を追うずるぼん。

試合には興味が無いのか、壁にもたれ掛けながら涎をたらして眠るへるへる。

「まあアレじやな、いつも知り合つたのも何かの縁。過去のことは水に流して仲良くなつて」

ほつほつほつ、と笑いながらアウダーの背中を叩くまぞつほ。

今の彼らからは酒場で出会つた時の雰囲気は微塵も感じられない。

「……それをアンタが言つなよ……」

真面目に考えるのが馬鹿らしくなり、アウダーは投げやりに答えると再び舞台へと目を向けた。

依然として一方的な展開ではあつたが、正直ここまで立つていられる、ゴメスの頑丈さには呆れを通り越して感動すら覚えてしまう。

「純粹な体術のみのガチンコか。闘氣を抑えてまでよくやるねえ」

闘氣とは、一流と呼ばれるレベルの戦士が扱う攻撃的生命エネルギーの総称である。

自身の身体能力を高めるだけではなく、武具に伝える事でその強度を増す事も出来る。

これを極めた者は、自身の闘氣によって伝説の武具に匹敵する力を持つ闘氣の刃を生み出した、とも伝えられている。

「器用なヤツ」

アウダーも闘氣を操る術は心得てはいるものの、魔法力を操る術に馴染んでいた事もあり、戦いの場では呪文を交えての戦法を多用していた。

「それにもしても、お客様大喜びじゃねえか。あの野郎、変なトコで空気読みやがって」

軽くとは言え、切りつけられれば当然痛いし出血も馬鹿にはできない。

ヒュンケルとの先の試合でも、何度か回復呪文を使って止血をしないなれば貧血で倒れていたかもしねない。

「俺の時にもつと手加減をしておけよ」

憮然として愚痴をこぼすアウダーを冷めた目で見るバロン。

「……お前もな」

お前が言つたと呆れた様子で見つめていた。マヌーサヒューリムを使用してヒコンケルを斬りつけた事を忘れているのかと。

「魔法使いが呪文使つて何が悪い」

馬鹿ですかアナタ、何言つてゐると言わんばかりのアウダーの表情を見て、バロンの中の何かがキレた。

セーラーレオナの件やら、修行時代の恨みつらみや。それらを抑え込んでいた堤防がここで決壊してしまったのだろう。非常にイイ笑顔を浮かべたバロンは、アウダーの顔面をアイアンクロード捕えると、そのまま片腕で持ち上げてしまった。

「……数年来の溜まりに貯まつた貸しをじりまとめて返してもうえるかなアウダー君」

「ちよつ、まつ、いた、痛いからー。コレホントマジで痛いからー！」

「あんなに楽しそうなバロンは初めて見たわ

「……あのレオナ、バロンさんを止めなくともいいの？」

「嫌よ、怖いもん」

ジタバタと抵抗をしていたアウダーであつたが、やがて力尽きたのかぐつたりとする。

さすがにダイもヤバいんじゃないかと思い、勇気を振り絞つてバロンにアウダーの助命を嘆願した。

ナニやら瘴氣っぽいモノを発しそうな雰囲気のバロンに、レオナも含めて誰も関わりたくは無かつたのだ。

正直ビビつたとも言う。特にレオナにとつては明日は我が身と他人事ではないのだから。

外見に反して根がへタしなでろりん達は、巨大な恐怖に立ち向かつたダイの行動に感動を覚えていた。

「ハツ！ テメツ、バロン！！ なんか川の向こうで帰れ帰れと手を振る人影が見えたような気がするんです！？」

跳ねるように飛び起きたアウダーは、バロンの襟元を掴むと捲し立てる様に一気に詰め寄る。

「落ち着けアウダー。恐らくそれは東洋の神秘“守護霊様”という奴だ」

大変ありがたいものだ。運が良いな、と落ち着き払つた様子でしれつと答えるバロン。

「そうか。アレがそうなのか」

修行時代、仲間内で起こつた思い出すのも忌まわしき手料理事件にてバロンが見たというその光景。

説明を求めるバロンに、それは守護霊様だ、などとその場のノリと勢いで同様の説明を行つたのはアウダーだったのだが。

自分が見てしまった以上、現実つてスゲーなど感心するしかない。

しきりに感心しあう馬鹿一人を眺める無垢なる瞳。

「あのわ、レオナ。賢者つて“賢き者”つて書くんだけよね」

あまり多くの字は読めないダイであったが、憧れであった勇者や僧侶、賢者といった文字は真っ先に覚えていたのだ。

「アラアイ～？」

「ほら、何とかと何とかは紙一重つて言ひひじいから」

パプーカ王国では、本来バロンレベルの賢者は、有事に備えて國內でひとつしりと構えているのが普通である。

今のように自分のお田付役として世界各地を巡る見分の旅に同行する事などはまずあり得ないと言ひてよい。

「……疲れているのね」

生暖かいぐらいに優しい眼差しでレオナはバロンを見つめる。本来ならば行わずともよい役田のために、疲れが溜まっていたのだろうと推察していた。

その実は、レオナの行動を諫める事、その無茶ぶりについているだけの適任者がバロンしかいなかつただけである。

「やっぱ、しばらく休養を申しつけたほうがいいかしじ～」

余計な心労が増えるだけから止めてくれと訴えるバロンの声は届かない。

レオナは少し真面目に考へてみた。代わりに誰が、である。

一番あり得るのは“パプニカ三賢者”であるアポロやマコン、ハイミである。

三賢者とは太陽と風と海を司るパプニカ王国の守護者の称号。心技体に優れた賢者に贈られるこの称号は、パプニカで魔法を曰指す者にとって最高の栄誉と言える。

三人とも、自分より五歳は年が離れているが、気心も知れている分、他の者達よりも気分的には楽ではある。

しかし、彼らは役割に忠実というか、どうしても臣下としての態度が目立ち、今のような羽田を外した行動はそうそう出来なくなるだろう。

そう考へると、バロンがお田付役から離れるのはあまり宜しくない。

甘えである事は自覚しているが、この見分の旅の後に行われる洗礼の儀が終わってしまえば、そこで一人の少女としてのレオナは舞台を降りる。

以後はパプニカ王女としてのレオナが舞台上に立つ事になる。おそらく、少女としてのレオナがこうして自由に振る舞える事は無くなるのだろう。

「な、に深刻そうな顔してんの？」

「ツー？」

思わず上げそうになつた悲鳴を必死に堪える。

俯いていた自分の顔を下から覗き込むように、言葉の通り田の前にアウダーの顔があつた。

「な、な、ちょっと、ちょっとアウダー！？」

突然の事にわたわたと慌てるレオナ。

赤面した顔を隠すかの槽に、ブイットと顔を背けた。

「いや、だから何なんだ?」

落ち着けあたし、と深呼吸を繰り返す。

どうにか落ち着きを取り戻したレオナは、観客達の歓声が一際大きくなつた事で、その視線を舞台へと向ける。

「お、チャンスだな

つられる様に舞台へと視線を向けたアウダーが呟いた。

そこでは、胴体に食い込んだヒュンケルの拳を、よつやく捕えたヒメスが両手で掴んだところであつた。

「それじゃ、夕方までにお願いね」

「おう、任せとくな

思わぬ好評で夜の分の食材が足りなくなると、ルイーダはその分の買い出しを行うため、商店街にまで足を運んでいた。

いつもの店に配達をお願いすると、時間に余裕がある事に気が付いた彼女は少し寄り道をしてから帰る事に。

「新しい露店でもないかな?」

人混みの中をのんびりと歩いていたルイーダは、そこで異様なモノに遭遇した。

3メートル近い高さの子山が、人混みを搔き分けて進んで来るではないか。

徐々に近づくにつれて、ソレが積み重なった荷物の山である事が分かる。

「そつか、そろそろだつたか」

もうそんな時期かと思い出し、ルイーダは荷物の山へと向かい進んで行つた。

「アレは買つたし、アレも……つん、これで頼まれていた分は終わりだよ、マアムお姉ちゃん」

「そつか。考えてたよりも時間が空いちやつたわね。ディアナはどうしたい？」

「久しぶりの王都なんだから　　つて言いたいけど。遅くなつてミーナに怒られるのも嫌だしなあ」

商店街を仲良く歩く二人の少女。

会話だけならば、それはどこにでもあるほのぼのとした仲の良い友人や姉妹のものだ。

マアムと呼ばれた桃色の髪の少女の周りを、ディアナと呼ばれた小柄な黒髪の少女が楽しそうにちょこちょこと動き回つている姿は、実に微笑ましい。

「ん？　へー、武道大会だつて。マアムお姉ちゃんも出たら？　絶対優勝できるよー。」

「う、バッタバッタと殴り倒して、と身振りを交えながら語るティアナ。

「あのね。私も女の子なんですが、普段どーゆー目で私を見ているのかがよくつくわかったわ」

そう拗ねたように言つマアムに、「メンメン」とじやれつくティアナ。

実に微笑ましい姿ではあるのだが、それに反して道行く人々は一人の姿を見ると避けるようにして道を空けてゆく。
悪意があるわけではない。善意の上で、であった。

「相変わらずすいせいわねえマアム。イロイロな意味で」

「え、その声」

「あ、ルイーダさん。久しぶりー」

「やほ、久しぶり。元気だつた？　ティアナ」

動く荷物の山の下に辿り着けば、そこにはルイーダの予想通りの人物の姿。

常識的に無理。誰が見てもそつとしか思えない量の荷物を、絶妙のバランスで“軽々”と運んでいたマアム。

そして、子犬のようにじやれついてくるディアナであった。

マアムとディアナ。二人は迷いの森の近くにあるネイル村で暮らしているルイーダの友人である。ちなみにマアムとディアナは姉妹ではない。

定期的に王都へと買い出しに来るマアムと、店の仕入れのためにこうして商店街に頻繁に顔を出すルイーダは、お互い顔を合わせる機会が多くた。

最初は挨拶程度であつたものが、いつからか言葉を交わすようになると、歳も近い事もあつてか瞬く間に打解けて友人となっていた。ディアナとはその少し後からの付き合いである。

「元気と言えば、最近お兄さんからの連絡はあつた？」

付き合いと言えばもう一人。

ルイーダはマアムやディアナに対して過剰なまでに過保護だった彼女らの兄的存在を思い浮かべた。

十五年前の戦乱の時に顔に大きな傷を負つたという事で、常日頃から仮面をつけて生活をしていたらしい彼。

しばらく前に置き手紙を残して旅に出たと聞いている。

「全然。でもラーハルト兄さんの事だから、何かあつた時にしか連絡なんて寄こさないとと思う」

自分にも他人にも厳しい人だったから、と苦笑するマアム。

(いやそれは無い)

本人がどう思つていたのかは判らないが、少なくとも客観的に見ていたルイーダやネイル村の人達、保護対象者であったディアナはラーハルトの過剰なまでの過保護つぶりに気が付いている。

ラーハルト本人は厳格な兄的存在のつもりであつたのだろうが、皆空氣を読んで何も言わなかつただけであった。知らぬは本人とマムだけである。

「まあ、だつたらいいんだけど。それにしても、最近ティアナが一緒に来る事が多いよね」

ラーハルトが旅に出てからま、マアムの付添いの相手が色々と変わっていたのだが、ここしばらくは当たり前のようだ。ティアナがついて来ていた。

「ふつふつふ。こ一見えても今ではわたしだつて村一番、じゃなかつた。三番目の使い手なのよ」

一番は母レイラ、二番は姉であるマアム、三番手は村長であったのだが、先日ぎつくり腰をやってしまい泣く泣くその座をティアナに譲つていた。

ど一だ、と十一歳の発展途上の胸をこれでもかと張るティアナ。すとんぺたん。

その隣にはボンキュッポン。

十六歳でありますながら既に完成の域に達しようかといつマアムの存在。

遠いあまりにも。

思わずティアナの心が折れかけるが、未来を信じてここまで倒れはしない。

だが、ルイーダはティアナのように未来を信じる等と言つていられる程の余裕はない。

恐るべき事に、ママのソレは完成ではなくさらなる成長を続けている。

そして、カラツとした性格、大の大人が束になつても敵わない強

さ、容姿も良く、属性“天然”を備えながらも、そのくせ実は家庭的という女の目から見ても優良物件。

これ以上まだレベルを上げる気かこの娘は。

客商売をしている以上、ルイーダも多少は自分の容姿やスタイルに自信を持つてはいたが、この件に関してはいかん友とは言え敵である。

「ええいっ！ それにしてもけしからんっ…… また育ちよってからに！」

「きやあ！ えええ、ちょっと、まつ、やめ あッ～～

ついにソレを驚掴みにしてもみしだくといつ暴挙に出た。荷物のせいで手を離す事も敵わず、抵抗できないマアム。往来で突如として始まった実にけしからん光景に、人々の注目が集まる。特に男の。

「また始ました」

ルイーダは良い人なのだが時々おかしくなる、とティアナは他人のフリを決め込んだ。

とは言え、いつまでもこのような事を続けさせていては、そのうち見回りの兵士達に見つかってお小言は必至である。

「それは嫌だなあ。レイラお母さん怒ると怖いもん」

ビードで止めるべきかと思案するティアナであつたが

「あれ？」

不意に辺りが暗くなつた事で、その顔を上げた。道行く人達も、何事かと空を見上げる。

まるで水面に生じた波紋の様に。

マアムもルイーダも、この場にいる全ての人が空を見上げていた。

「巨人？」

誰が呟いたのか。

逆光に浮かぶその影は巨大な翼を持った巨人にも見える。影はそのまま闘技場へと向かい飛び去つて行く。

「お、おい、何だよアレ？」

「ド、ドリラゴンなのか？」

「魔物じゃないのか？」

ざわめき始めた人々の中で、ティアナは俯いてその小さな肩を震わせていた。

（見間違いなんかじゃない）

どうしてそんな事が分つたのか。

ただ、ティアナにはあの影が己を見上げる人間の姿を見て嗤つた事が解つた。

理屈ではなく、感覚がそれを捉えていた。それが絶対的な力の差に対しての優越感から来る黒い感情である事も。

怖い、今の自分ではどうやっても敵わない。

そう思い、恐怖に震えた。

その事が 悔しい。

「ゴメン、ルイーダ。ディアナと荷物をお願い！…！」

「え、ちゅうと…？ うわきゃああつ…」

マアムはそう言って荷物をルイーダに任せると、影を追つて走り出した。

大量の荷物に埋まり文句を言うルイーダに、ゴメンと手を挙げて駆ける。

マアムもまた、ディアナほどではないが、あの巨大な影に良くないモノを感じていた。

あの先で、きっと良くない事が起こる。その確信があった。

母から受け継いだハンマースピアを握りしめ、師の言葉を思い出す。

「見過いす事なんて……」

「待つてお姉ちゃん、わたしも行く！」

「ディアナー？」

自分を追いかけて来たディアナの声に、マアムは咄嗟に駄目だと言いつになつたが、ディアナの手に握られた物を見て、この子もまた師の教えを受けた者だと思い直す。

「危なくなつたら逃げなさい。約束よ

「うん。……分つてゐる

握りしめた“魔弾銃”を胸元に抱き、緊張した様子で頷くディアナ

ナ。

その硬い表情を見たマアムに不安がないと言えば嘘になる。
しかし、ここで駄菴と言つても来るだろ。誰に似たのか」
「うところは頑固だから。
だったら、自分の知らないところで無茶をされるよりはと、マア
ムはティアナの同行を認める事にした。

何もなれば、そう願いながら。

しかし、その願いは届かない。

あの影に向かつた先である闘技場へと近付くにつれて、異変がハ
ッキリと分った。

次第に大きく聞こえる人々の悲鳴や怒号。次いで聞こえる爆発音
は、そこが既に戦場と化している証明。

戦う力を持たない者は逃げ惑うしかない。

手にしたハンマースピアを強く握りしめたマアム。
すれ違う人が増える中で、もさつとした特徴的な髪形をした中年
の男が倒れこんだのを見たティアナは、その男に駆け寄るとホイミ
を唱えて傷を癒す。

「おじさん、向こうで何が起つたの?」

「ば、化け物が出たんだよ……」

男は語つた。

決勝戦の最中に、闘技場の中に鎧を着た馬鹿でかい化物が現れた。
指示に従つて外に逃げてみれば、そこには怪しい男女が待ち構え

ており、六本腕の「一レムが観客達を襲い始めたのだと。

「中ではアウダー達が、外ではバロリアや兵士達が戦つちやいたけどよ。ありやあ俺にだつて普通の相手じゃねえって事ぐらっこ分る！ こうなつたら店にいた奴ら全員引っ張つて来てやる！…！」

「ちょっとー おじさん！？」

「ありがとよ嬢ちゃん。もう大丈夫だ。城下にルイーダの酒場つて店がある。騒ぎが収まつたら来てくれよ。お礼をするぜ」

そう言つと、男は城下へと走り去つて行つた。

「……正義なき力は無力、力なき正義は無力、……」

魔弾銃を握りしめ、師の教えを反芻するティアナ。その眼にはもはや怯えや迷いは無い。

「よしつー！」

改めて気合を入れたティアナは、先を行くマアムの後を追うべく駆け出しへ行つた。

強襲ザングレイ

「ゴメスの腹部に突き立てられたヒュンケルの拳。その光景に観客の誰もがゴメスの敗北を確信した。

しかし、アウダーとバロン、そして当人同士であるゴメスとヒュンケルは違う。

「……へつ、へへへ」

自分ではヒュンケルの動きを捉えきれないと悟ったゴメスが取つた勝利に繋げられる唯一手。

「……や～っと 捕まえたぜ？」

肉を切らせて骨を断つ、といつ言葉を実践したのだ。

ヒュンケルからの攻撃を受けるといつ事は、彼が自分の間合いで居るといつ事。この瞬間であれば手が届くのだ。

問題はヒュンケルの一撃をまともに受けて耐えられるかどうか。結果としてゴメスは賭けに勝つた。そして、耐え忍んだ果てにようやく得た好機。

逃がしてたまるかと残る力を振り絞り、ゴメスはついにヒュンケルの腕を掴み取る事に成功した。

「 してやられた、か。たいしたタフネスぶりだ」

魔物顔負けのその巨体、鍛えられた肉体は飾りではなかつたといふ事か。

甘く見ていたわけではないが、正直今の一撃で終わらせようと考えていたヒュンケルは、このゴメスの覚悟を素直に称賛していた。

「まつたく、恐れ入る」

攻勢から一転、ついに窮地に陥ったヒュンケル。観客達はこの展開に否応もなく興奮する。

試合は今までに止念場を迎えるとしていた。

「おおー、すっげえなあのデカイのー。ここのやつちまえー。」

「うようとひよつとー、ヒュンケル様がピンチじゃない！？」

もはや完全にただの観客と化してくるでかつてあるほど。

「ああああああー。」
「ハゲー、なんてことをするのよおおおおおお！」

今の自分達がどれだけ微妙な立場であるのか。二人の頭の中からは綺麗さっぱり消え去っていた。

「んお？」

美形のピンチに我を失ったのか。

ずゐぼんは隣にいたまだほのロープの襟を摑むと、

「お、お、お、お、ま、待て、やめ、やめ ガクン」

持ち上げて激しくショイクを繰り返す。

白田をむいたまだほの様子など、興奮したずゐぼんの眼には全

く映っていない。

巻き込まれる事を恐れたでるりんはバロンの背後へと早々に避難し、ぐるぐるは相変わらず涎を垂らして眠っている。

今の彼らに勇者様と称えられていた時の面影は微塵も無かつた。

「ほら、何してんだよダイ！　あんたもヒュンケル様の応援をしなれこよー！　ほら『メちゃんもー』

憐れ、ただの屍と化したまぞつほをずるほんば『ハリ』のよつに放り捨てる。

「え、え、え、うわうわつわー？　た、助けてアウ　むぎゅー！」

「ピッ、ピッ！？」

生贊を失い手持無沙汰になつたのか、ずるぼんは近くで観戦していたダイを捕まえると、『メも巻き込みその豊満な胸元へと抱き寄せた。いわゆるぱふぱふと呼ばれる体勢である。

色気も無ければ艶も無く、他意も無い。ずるぼんにしてみれば近所の子供を相手にしているノリである。意外と面倒見が良いらしい。まだ夢見る無垢な乙女であつた頃、ずるぼんの将来の夢は保母さんだった。

(わ、悪い奴らだつたはずなのに、この馴れ馴れしさは何なん
むぎゅー！)

根が単純なダイもさすがに『惑つ。

特に、この顔全体を覆い尽くす柔らかで温かい感触に。

デルムリン島を出てからこれまで、急速に異性と触れ合つ機会にさらわれているダイとしては、もうびつしていいのかが分らない。

嬉しいような恥ずかしいような、とにかく何が何だか分らない。そんなダイにも分つていい事が一つある。

「あんにゃるめ。まさか天然のラッキースケベか？ 許せんな、こ
こは保護者として正しい教育を！」

「のままでは自称保護者からヒドイ目に遭わされそつだと言つ事
であった。

「……お前は子供相手に向を言つてる？」

「あふっ！？」

バロンの痛恨の一撃。

「なにしや」

「自重しや、この変態」

レオナの止めの一撃。

「　　がふッ！？」

そして仕上げどばかりにぐりぐりと踏みつけ攻撃。そのスジの方
々にはご褒美だがアウダーはまだその領域には達していない。

主従の完璧な連携攻撃の前に、今日三度目の敗北を喫していた。

「チイツ！ しかし伝説の遊び人パノンを目指した男としてはこの
まま黙つてやられるわけには！」

「へへ、じこつ、しぶとこー!？」

見下すレオナ、見上げるアウダー。

互いの視線が交差し、ぶつかり合ふ、そしてアウダーの視線が逸れた。

「 黒、か。まだ早 」

「 しね 」

「 うわひとねおうー? 」

氣合い一発。バッタのように跳ね起きるアウダー。

お約束に身体を張れても、レオナの本氣の踵を前にやはり命は惜しかった。

「昔はカツコ良かつたつてーの」「……むかしへこなわ。アンタにはいつもんこ女心つてヤツを身体の芯まで呑き込まなきゃいけないと常々思つていたの、特に今」

「いや、俺は男の子なんぞ女心なんて呑き込まれてもわかつっこないから。わかりっこないから」

「遠慮しなくともいいんですよ、おにこわま~」

その天使のような眩しい笑顔が怖すぎぬ。

じわじわと壁際に追いつめられるアウダー、じつよるレオナ。

蛇に睨まれた蛙である。

「あ、なんかその呼び方久しづり? 怒つていらっしゃいましたり

「…」されてます？ 助けてバロオオオオオオン！？ 友が貞操の危機だよ

「そうか。良かつたな。玉の輿だな」

舞台上に田を向けたまま、バロンはぞんざいに答へる。

も「好きにしないと言わんばかりの態度である」と思っていた。

「んふふふふつ、觀念なさい」

待て、落ち着

両手をわきわきとさせたレオナがアウダーに触れようとしましたが、その時であった。

舞台の上を巨大な影が覆ったのは

「んあ、なんだありやあ？」

「鳥にしては随分と大きいのよ……って」

でろりんとまぞつほが上げた絶叫に、何かあつたのかとアウダーとレオナが舞台へと視線を向ける。

『クウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ』

「何だ！？」

「きやあつー？」

突如聞こえたその甲高い鳴き声に、アウダーは咄嗟にレオナを抱き寄せる。

その直後、巨大な何かが舞台の中央に落ちたのを見た。

ドゴンッ、という轟音と共に石畳は砕け散り、撒き上がった砂塵が舞台を覆う。

その衝撃によって壁には亀裂が走り、通路の天井からはパラパラと破片が落ちて来る。

「ちゅちゅちゅ、ちゅつとーー！？ なんなのよーー！」

「わわわ、ワシが分るわけないじゃろがーー！」

「あれってガルーダだ！ でもあんな大きな奴は島でだつて見た事ないよーー！」

「飛び去つて行くな。何かを運んできたという事か？ アウダー、レオナ様は無事か？」

慌てふためくでおりん達とは対照的に、バロンは冷静に状況を判断しようと周囲を窺う。

「大丈夫かレオナ？」

「う、うん。ちょっと耳鳴りがする様な……気がするけど」

胸元から聞こえるレオナの声が、予想以上にハッキリしていた事にアウダーは内心安堵していた。

「大丈夫だ。バロン、そつちはどうだ？」

髪の毛に付いた埃を払つてやり、レオナの身体をそつと離したアウダーは舞台の様子を窺つているバロン達の元へと向かつた。

それまでの場内の熱狂が、水を打たれたように一気に静まり返つていた。

空から何かが落ちて来た。

田の前で起きた事はこれが全てである。

誰もがその事を分つてはいるのだが、あまりにも突拍子が無さ過ぎて、何が、何故と、その意味を理解する事が出来なかつた。

「な、何事か！？」

観客達が呆然と、呆気にとられる中で、貴賓席ではいち早く我を取り戻したシナナが兵士達に状況の確認を求める。

「い、いえ、その、空から何かが降つて来た、としか……」

「そんな事は分つておる！　じゃから何がと　いや、怒鳴つてすまんな。どうやらワシも混乱しておるようだ」

「いえ、王の心中お察し致します。我々もそうですから……」

報告する兵士もしどろもどろであり、彼らもまた何が起つたのかを理解する事が出来ていません

「観客達は 無事のよひじゅな。やひじゅ、選手はどうなつた! ? 無事か! ?」

誰か、直ぐに舞台へ。

シナナが兵士達に命じようとした時にそれは起つた。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアツ！』

それはまさしく獣の咆哮。耳をつぶせばかりの轟音が響き渡つたのだ。

舞台の上で撒き上がっていた砂塵が突如として渦を巻き、まるで巨大な柱の様に立ち昇る。

な衝撃を感じていた。

さすがに側近の兵士達の中には膝を着く者はいなかつたが、氣の弱い文官などは腰を抜かしている。

全血を調査する悪寒

この感覚を知つてゐる。

若き頃、自ら兵を率いて魔王の軍勢と相対した時に感じた
悪しき魔力の波動を。

「馬鹿な、ありえん！？」
まさか……まさか！？」

『グウルゥアアアツ！！』

そのシナナ王の言葉を遮るよつに、砂塵の柱がまるで内側から弾けるよつに消し飛んだ。

「我が名はザングレイ！」

その中からゆっくりと歩を進める牛頭の巨人。
日の光を受けて金と銀の光を放つ重厚な金属鎧。
身の丈はあるうかという巨大な戦斧を手にしたその異様。
事ここに至り、ようやく状況を理解し始めた観客達の中から次第に悲鳴にも似た声が上がり始めた。

「ぐわははははははは…。 どうした人間ども」

巨人が手にした戦斧を無造作に振るつ。

「対応が遅い、 反応が鈍い！」

生じた突風は衝撃波と化して、舞台を覆う壁へと叩き付けられた。

「せつかく時間をくれてやつたとこのに畜生なものだ！…」

亀裂を奔らせて、壁面が崩壊する。

「覚えておぐがいい人間どもよ…！」

景気付けのつもりか。巨人が己の力を誇示するべく戦斧を足下に叩き付けた。

轟音と共に崩れる舞台。

「我こそが新たなる魔王軍百獣魔団を統べる者！ 獣将ザングレイよー！」

再び名乗りを上げたザングレイが戦斧を振るつた。
観客席に向けて。

「グハハハハツ、グハハハハハハハハハツ！！」

爆音が響き粉塵が舞い上がる。

瓦礫の山と化した一角に赤い色が流れていった。

誰かの上げた悲鳴はそれを聞いた者に伝播し、恐怖は瞬く間に伝染する。

恐怖に怯え、泣き叫び、逃げ惑う人間の姿に満足したのか。
ザングレイは口元を歪ませると、この場にいる人々を絶望の淵に叩き落とすべく吼えた。

「聞け人間どもよ！ これより俺様の手で貴様らを皆殺しにしてやろう。貴様らの嘆きの、絶望の、怨嗟の声を、魔王軍再興の狼煙としてくれるわー！！」

泣き叫ぶ人の声、巻き起こる悲鳴。

全てがまるで遠い場所の出来事のようだ。
人が死んだ。目の前で。呆気なく。

この現実感の伴わない光景を前にして、ダイは呆然とその場に立ち尽くしていた。

「あの野郎、やりやがった！」

そんなダイを押し退けて人影が飛び出す。
アウダーだった。

「アウダー！？ どうする気なんだよ！？」

「ぶつ瀆す！！ バロン、お守を頼む！」

無茶だとダイが引き止める間も無く、バロンが応じた。

「使え！」

バロンがアウダーに一本の短剣を投げ付ける。
それはパブニカ王家に伝わる三本の聖なるナイフ、その一刀。海の紋章が刻まれたナイフであった。

秘術を用いて精製された特殊な金属を使用したそのナイフは、並の刀剣とは比べ物にならない切れ味を有していた。パブニカ王家の秘宝の一つである。

「助かる！！」

先の試合で剣を失っていたアウダーにとって、それは何よりの心

遣い。

素早く腰に差しこむと、ピオリムを唱えてザングレイへと向かい駆け出した。

「レオナ様、ダイ君。アウダーがアレを引き止めている間に我らはここから離れます」

そう言って、バロンはレオナとダイの手を掴みこの場から離れようとする。

「そんな、駄目よー！」

しかし、レオナはその手を払つとキッと強い眼差しでバロンを睨み非難した。

「足手纏いだと言つてているのですー！」

「そんな事分つてるわ！ それでもこゝにいる人達を放つてなんて置けないでしょーーー？」

そう叫ぶレオナが見つめる先には逃げ遅れた人々の姿があった。

「自分に……出来る事をするだけよ。お願ひバロン」

決意を決めたレオナの眼差し。

その瞳を見つめ続け、やがて溜息とともにバロンが折れた。

「分りました。それではレオナ様は私と一緒に彼らの避難を手伝いましょう。それから」「

そして、バロンは後方で騒がしへりひたえてこむでるつん達を見る。

「ああ、おこおこおこ。ふ、ふ、エエヒツルだだだ！」

「ビリヒ、逃げるに決まつてるじやうが！」

「や、そーよ！ アイツ皆殺しどかれてるじやない！ 絶対バイつて……！」

「待てお前達。この際だ、逃げるなとは言わ々。ならばダイ君も連れて行け」

「えつ？」

「ここで自分の名前を出された事に驚くダイ。
自分もレオナ達と一緒に逃げ遅れた人々の非難を手伝つものとばかり思つていただけに、バロンの言葉は意外過ぎた。

「そんな、おれも手伝」

「あ
「氣付いてはいないのか？ 自分のその震えた身体を
いふ事に氣付く。

バロンにさう指摘された事で、ダイは初めて自分の身体が震えて

「な、何だよ、こ、こんな、ものッ……ッ……。こんなものっ！」

「♪♪♪～～～」

心配する様に飛び回る「メ。それに対して何でもない、大丈夫だと必死に震えを抑えつけようとするダイ。

その様子をじっと見つめていたバロンは、ダイの肩に手を置き田線を合わせる様にしゃがみ込むと、静かに、諭すように語った。

「キミのその気持ちはとても尊いものだ。だが、キミはまだ幼い。焦らずに、その気持ちを大切にしながらゆっくりと成長すればいい」

「……おれが子供だから？」

ダイはバロンと田を合わせようとせず、俯きながら堪えるようにして呟く事しかできない。

「誰だつて子供だった頃はあるものだ」

ダイの肩を軽く叩き、立ちあがつたバロンはでろりん達に頼むぞと告げてレオナの手を取る。

行きましょうと、バロンが駆け出そうとしたその時、パンと言う乾いた音が通路に響いた。その音にバロンとレオナが振り返りひとつして、もう一度。

自らの手で両頬を赤く腫らしたダイが立っていた。

その身体に先程までの震えは無い。

真っ直ぐに前を見据えるその姿に、全くと苦笑するバロン。

「……分った。キミも手伝ってくれ、ダイ君」

「うんー」

ダイ達が駆け出して行き通路に残されたでろりん達は、じぱりく無言のままお互いの顔を見合させていた。

そんな中ひつそりと田を覚まし、一連のやり取りを見ていたへろへろがポツリとこぼす。

「……オレたちば、これから、どうする？」

その言葉に、でろりん達の間に緊張が走った。

この混乱の中であれば、この国から逃げ出してもバレはしないだろ？

先程バロンも逃げていいと言つたではないか。

正直言つて、無償奉仕なんて嫌なのだ。

こんなヤバそうな厄介事など「ermen」なのだ。
ならば、逃げるかと、普段の彼らであればそうなる。これまでだつてそうしてきたのだから。

「このまま……逃げるのもなあ」

化け物に向かつて行つたアウダーを見た。

「なんだかねえ。あんなのを見ちゃつたら……ねえ？」

震える身体に喝を入れ、勇気を振り絞つたダイの姿を見た。

「うーうーでほとぼりが冷めるのを待つ、とこつ手もあるんだ？」

自分に出来る事を、さつまつて駆け出したレオナを見た。

「人、死んじゃったんだよな」

冷静に、己のなすべき事をなそりとするバルонの姿を見た。

「なあ、あの殺された人達の中にわ、俺達の事を 勇者様つて呼んだ人はいたのかな？」

何故そんな事を思ったのか。口に出したでろりんにも分らない。

「……さてな、そんな事は神のみぞ知る、とこりヤツジヤ わりじ。小悪党なワシリには一生かかっても分りはせんよ」

普段と変わらぬ様子で何でもない事のようこまざつほが答える。

「そうだよな。小悪党だもんなオレ達つて」

そう言つてでろりんが笑つた。

「そーそー、細かい事を考えたつてしがないわよね。アタシらは所詮アタシらでしかないんだもの」

「だよな。なら、俺達らしくやるか!」

途端に明るむと騒々しさを取り戻してでろりん達。

開き直ったのか、それとも吹っ切れたのか。

確かな事は、彼らの中で何かが変わったと言つ事であった。

「ふはははは、どうしたどうした！ 最初の威勢はどうしたあ！！」

「「うぬせえんだよ」」の野郎！！」

ザングレイの振るう戦斧の一撃をひたすら回避し続けるアウダー。繰り出される攻撃のほぼ全てが力任せの大振りであつたため、回避する事にはさほど苦労は無かったのだが、問題はその余波による衝撃波と飛散する瓦礫にあつた。

なまじアウダーの速度が高速であるがために、たかが瓦礫と言えどもまともにぶつかっては多大なダメージを受けてしまう。

事実、すでに回復呪文により傷は癒しているものの、アウダーの左肩は流した血の跡によつて赤黒く染まっていた。

「ベギラマ
閃熱呪文！！」

ヒュンケルに放つたギラとは違つ、命を奪つつもりで放たれた全火力の閃光。

それは、たちまちの内にザングレイを包み込み焼き尽くす はずであった。

「何つ！？」

「グフフフフフ、この鎧にその程度の呪文など効く物かあッ！！」

ザングレイの宣言通り、アウダーの放つたベギラマはザングレイの鎧に触れた瞬間に拡散し、その威力を著しく減退させていたのだ。「鏡の鎧？ いや、拡散しているところを見ると散魔の系統か。なんにせよ伝説級の武具じゃねえか

推察を試すべく火炎呪文^{メラ}や氷系呪文^{ヒヤド}を唱えるが、結果は同じ。ならばと、王家のナイフで斬り付けるが、鎧にはキズを、皮膚には掠り傷を負わせられる程度でしかなく。

相手の攻撃は当たらないが、こちらの攻撃も通じない。

攻撃を当てられないザングレイと、当ても大したダメージを与えないアウダー。

一見互角のようであるが、そもそも人間と魔物とでは基本的な身体能力が違う。スタミナも体力も違う。

更には、その差を魔法によって埋めている今のアウダーには、魔法力という制限がある。

永遠に呪文を唱え続ける事など誰にも出来はしない。

魔法使いにとつては魔法力イコール精神力のようなもので、精神の疲労は肉体の疲労にも繋がる。その逆もしかし。肉体の疲労は精神の疲労にも繋がる。

このままの状況が続くのであれば、やがて肉体的にも精神的にも疲労したアウダーの敗北は必至であった。

「だからってな！」

しかし、アウダーに焦りは無かつた。

鏡の武具では無く、散魔の鎧であるならば打つ手はある、と。

周囲を見渡せば至る所に瓦礫の山が出来ており、中には今この時にもガラガラと崩れ落ちている場所もある。

「がははははははッ。どうした小僧、もう終わりではつまらんぞ？」

戦いの余波で随分と場内が破壊されていたが、客席に残っている人影はまばらになっている。

「まさか。これからだぜ？」

なら避難は上手く進んでいると思う事にして、アウダーはその視線をザングレイへと向けた。

「今からその『血漫の鎧を 粉碎してぶつた切る！』 物理障壁^{スカラ}呪文！」

魔法力によつて構成された障壁がアウダーの身体を包み込む。真つ直ぐに振り下ろされた戦斧を重心を移動させる事で躱し、ザングレイの懷へと一足で踏み込む。襲いかかる衝撃波と飛礫は展開されたスカラ障壁の前にその勢いの大半を失っていた。
それでも幾つか障壁を抜けた飛礫がアウダーの身体に当たるがそれを感じている余裕は無い。

「小癪な真似を…！」

握り潰してくれると、ザングレイは手にした戦斧を投げ捨てて懷に潜り込んだアウダーに剛腕を伸ばす。
すると、両手をザングレイの鎧に押し当たったアウダーがニヤリと笑みを浮かべた。

その不敵な姿にいぶかしみ、初めてザングレイの表情から余裕が消える。

「加圧呪文！」^{ボミオス}

「ぐうおッ…？」

ズンと、全身を襲う圧迫感にザングレイの口から呻きが漏れた。

「な、何だこの感覚は？　この鎧がある限り呪文が効くはずが！？」

己の武具に対する絶対の自信。それが大きければ大きい程に、覆された時の動搖もまた大きい。

「ボミオスは空間に作用するんだよ、満遍なくにだ。意外と隙間が多いぜ、その鎧」

ザングレイの懐から飛び退いたアウダーが、その手に王家のナイフを構える。

「ああ、そうだ。ちなみに、ボミオスの効果は今テメエが感じてるソレだけだ。はははっ、傑作だつたなさつきの顔は。偉そうに大口叩いておきながらねえ」

そこで一拍置くと、アウダーはやれやれと小馬鹿にするように続けた。

「アーリンさんじゃねえよ、マヌケ」

「貴様アアアアアアアアアアアアアアアツ！」

ボミオスの圧力を気迫で搔き消したザングレイが怒りに満ちた眼差しをアウダーに向けた。

粉碎だのなんだのと言つておきながら、やつてみせた事はただの
こけおどし。ハッタリに過ぎなかつた。

一瞬とは言え脅威と感じた事に、舐められたと馬鹿にされたのだ

と悟る。

完全に頭に血が上ったザングレイに周囲が見えるはずも無く。目の前的小癩な人間しか見えていなかつた。

戦斧を即座に拾い上げて吼える。

「ただでは済ませんぞッ！！ なぶり殺してくれるわアアアアアッ
！！」

砕け散れとばかりに手にした戦斧を振り下ろした。

「ご協力感謝いたします！」

「それよりも後どれ程の人が？」

「いえ、もうここまで来れば後は我々だけで十分です。まだ何が起
こるか分りませんのでレオナ様方も早く避難を！」

レオナ達と共に、逃げ遅れた観客を闘技場の出入口まで誘導した
兵士は、そう言い残すと再び場内へ駆け出して行つた。

彼と入れ替わるように、数人の観客を連れたダイガやつて来る。

「後はアウダー達ね。バロン、私達の事はもう大丈夫だから」

「……拙いな」

助けに行ってと続けようとしたレオナであったが、そのバロンの

眩きに視線を追つて、その意味を察した。

闘技場から避難する人々の流れに反して、何が起こったのかと状況を知りうとした野次馬達が集まり始めていたのだ。

「ああっ、もう…こんな時に…！」

その光景に、レオナは思わず頭を抱えくなつた。

呑気な野次馬が集まる余裕があるという事は、ここ以外には特に異変は起きていない、という事なのだろう。

だからと言って、何も起こらないとは限らない。

場外の脅威を警戒したからこそ、場内で暴れている魔物をアウダーに任せて観客達の避難を優先したのだから。

「またややこしい事になつてきたわね」

愚痴をこぼしても始まらない。

やるべき事をやろうとレオナが気合いを入れた。

「レオナ様！」

その時であった。

「危ないレオナ…！」

「え？」

「ゴッ、という鈍い音と身体に感じる衝撃。

気付いた時には、レオナはダイに押し倒されるよつた格好で弾き飛ばされていた。

「 ちよつ ！？」

一体何がと、起き上がろうとしたレオナの目に異様な光景が映る。先程まで自分が立っていた場所に何かが撃ち込まれたような跡が出来ていたのだ。

「 ツー？ まだ！」

「 きやあツー？」

再びダイに弾き飛ばされるレオナ。

上空から赤い光が大地に向けて撃ち込まれる。
ゴツ、ゴツ、ゴツと、更に続けて五つ。

逃げようとする人々の行く手を遮るかのように、赤い光が次々と地面に突き刺さる。

『 ホントにねえ。まつたく、ややこしい事をしてくれたよ。あの『
カブツ』は』

「 誰つー？」

突如、脳裏に響いた女の声にレオナ達は辺りを見回す。
その気配に、真っ先に反応したのは誰であろう『ゴメ』だった。

「 ピピイーーーーツー！」

「 そこか、氷系呪文！」

その声に応じてバロンが上空に向けて呪文を放つ。
凍つつく冷氣を纏つた無数の氷塊が鋭い刃と化して、ゴメが示し

た方向へと吹き荒れた。

『巻き起これ炎よ！』

男の声が響く。直後、炎の渦が巻き起「ヒヤダル」の冷氣とぶつかり合つと、やがて互いに消滅した。

「何者だ？」

ロープの中から金属製の小ぶりな杖を取りだしたバロンが、上空に向けて油断なく構える。

立ち上がったレオナを守るように、ダイが立つ。

その手にはレオナから万が一と預けられた聖なるナイフが握られていた。太陽の紋章が刻まれた、王家に伝わる三刀の内の一本である。

「ふむ。珍種とはい、たかがスライム」ときに見破られるとは。メネ口よ、お前の幻術も自分で言つ程には大した事も無いな」

「馬鹿を言わないで。ただのスライムじゃないわよ、アレ。それに、他の人間は気付いてもいなかつたでしょ」「元

空気が歪む、とでも言えばいいのか。

ぐにゃりと歪んだ空間から二つの人影がにじみ出す様にして現れる。

一つは緑の髪に青い肌、扇情的な身体のラインを強調する様な服を着た妖艶な美女。

「……魔族か」

バロンの咳きに女が笑う。

特徴的な青い肌は、日の光を知らぬからだと、その身に流れる血が青いからだとも言われている。

見る者を虜にするような妖艶な美貌は、しかしその内に猛毒が含まれている様にバロンには感じられた。

「何者だ、貴様らは」

そしてもう一つ。

鍛え抜かれた屈強な肉体。口元が開いた銀色の仮面を着けた魔族の男。

その手には、両端に炎と氷、赤と青の意匠を施された三節棍が握られていた。

「お前達もアイツの仲間かつ！！」

ダイは決して気後れまいと、聖なるナイフを握り締める。

魔族の男はゴメスよりも小柄でありながらも、その肉体に秘められた力はザングレイに匹敵するのではないかとダイには感じられた。

二人の魔族がゆつくりと地面に降り立つ。

些細な動きも見逃すまいとレオナが身構える。

「フフフッ、可愛いじゃないアナタ」

「お褒め頂き光栄ね。そう言つ貴方はどちら様？」

レオナは周囲を鼓舞するためにあえて軽口を叩いて見せる。それは自身を鼓舞するためである。

「そうね、せっかくだから自己紹介でもしましょうか？私の名前はメネロ。仲間内では妖魔將軍と呼ばれているの。そして彼がブレーガン」

よろしくね坊や、と。

突然“耳元で囁かれた”言葉に、ダイの身体に緊張が走る。メネロは優しくダイの頬を撫でた。

「ツツ！？ うわああ！…」

その感触を振り払うように、慌ててナイフを横薙ぎにしたダイ。しかし、その一撃は空を斬るのみ。

「そんなに怯えなくてもいいじゃない。そう思わない、可愛らしくオジヨウチャン！」

「なつ！？」

(そんな、いつの間に！？ いつ動いたの！…)

今度はレオナの耳元でメネロが囁いていた。メネロの手がゆっくりとレオナの首に掛かる。

その感触に、レオナは思わず悲鳴を上げそうになるのを必死に堪えて呪文を唱えた。

「閃熱呪文！」
ギラ

そこにはいるであろう相手を狙つて、振り向きそのまま呪文を放つ。

「嘘！ そんな！？」

しかし、そこにメネロがいない。

「ホント、可愛いわねえ」

クスクスと、たまらないと言つた様子でメネロが笑つていた。その声にレオナが振り向けば、メネロは最初に降り立つた場所から動いてはいない。

「マヌーサか」

「アラ、アナタには通じなかつたのね。ふふつ、これは期待してもいいのかしら？ だつたらアナタいいわよ、スッゴクね」

正解よと、バロンの咳きにウインクをして答えるメネロ。

「そう言つ擣め手が大好きな馬鹿が知人でな」

あれが幻だつた。その答えにダイとレオナの緊張が増す。

「いい加減にしろメネロ。遊びに来たのではない。慣れ合いなど不要だ」

腕を組み、これまで黙つてやりとりを見ていたブレー・ガンが口を挟んだ。何をしているのだ、と。

「見る、既にかなりの人間がこの場所から離れようとしている。これでは無駄な時間が掛かるぞ」

「私としては、別にもううでもいいような気もするんだけど。そ

れにこっちに来る人間もいるじゃない」「

ほんっと、勘弁してほしいわよねえ。

メネロ眩き肩を竦めた瞬間、赤い光が撃ち込まれた地面が音を立てて盛り上がる。

「そんな！？」

その光景を見てダイが叫ぶ。

一本、三本と、巨大な腕が地面を突き破る。
やがて六本の腕を持つた巨大なゴーレム 魔神像が姿を現した。
その数は六体。

目の前で起きたその光景を目撃した人々の驚愕は言つまでもない。

『オオオオオオオオオオン！－！』

咆哮を上げて動き出す魔神像。

「ああ、実はね、私達は中で暴れているおバカさんがその巨腕を振りかざす。
狙いは周囲を逃げ惑う人々だ。のよ」

額にある紅い珠を輝かせ、土くれの巨人がその巨腕を振りかざす。
狙いは周囲を逃げ惑う人々だ。

「ホントはね、まだ私達の存在を知られるわけにはいかなかつたの
よ？ それをおのおバカは。だから、知られた以上は黙つてもら
わないと困るのよ」

下つ端つて辛いわよね。肩を竦めたメネロの手にはいつの間にか
茨の鞭が握られていた。

一度、二度と振るう。パン、パンと空気を叩く乾いた音が響く。
その横で、ブレーガンが無言のまま二節棍を構える。

「手っ取り早く、ですって。残念だわ。本当よ？　だって、アナタ
達みたいな可愛い子もみんなまとめて　」

「　殺さなくつけやあこけないんですもの」

死神の咲笑

「ハツ、傑作だつたな。ビビッてんじやねえよ、マヌケ」

「貴様あああツー！」

地に落ちた戦斧を拾い上げ、頭上高く振り上げる。
怒りに燃えるザングレイの目には、もうアウダーしか見えていない。

激情に身を駆られたその思考はただ一つ。小癪に笑うアウダーを叩き潰す事のみ。

膨れ上がった筋肉がギチギチと音を立て、身に纏う鎧を押し上げる。

「グうオラアアアアアツー！」

大地もろとも碎けると言わんばかりに、ザングレイは振り上げた戦斧を振り下ろした。

「単純なヤツで助かるね！」

まともにくらえばダダでは済まない一撃も、当たればこそ。

(出所が分ればなー！)

駆け引きも技も何もない、そんな力任せの攻撃を避けるのは容易い。

空を斬り、舞台に叩きつけられる戦斧。

飛び散る瓦礫はスカラの障壁に任せ、アウダーは振り下ろされた

戦斧を足掛かりとして一気にザングレイの眼前へと飛び込んだ。

右手のナイフを逆手に持ち、左手でその柄を押さえつけながら呪文を唱える。

「バイキルト！」

淡い輝きがアウダーの全身を包み込み、ナイフを手にした右腕に集束する。

魔法力による身体強化呪文の一種であり、術者に限界を超えた力を与えるという希少呪文。

しかし、それ故に負荷も大きく、呪文の効力は全力を振るうのであれば一撃で失われる。外せば次は無い。

淡い輝きを放つ刀身を前に、ザングレイの血走った瞳が驚愕に見開かれる。生じたその隙を逃さずアウダーが次の一手を打つ。

ザングレイの視界を覆い隠すように左手をかざす。視界を遮られたザングレイの目に映つたのは新たな魔法力の輝き。

「爆裂呪文！」

至近距離からの爆裂呪文。

収束した魔法力が光球となりその手から放たれようとした瞬間アウダーの視界がブレた。

次いで熱が冷める様な急速な脱力感に襲われ、構成したイオの魔法力が霧散する。

(しまつた！？ こんな時にッ！－！)

魔法力の急激な消耗による精神疲労。

それは、魔法を使う者にとって最も重大な、避けねばならない事

態であつた。

冷静なつもりでいたアウダーであつたが、観客の死を目の当たりにしたダイが呆然自失となつたように、彼もまたその光景に冷静さを欠いていたのだ。

そして間の悪い事にヒュンケル戦からこれまでの短時間に魔法を多用し続けたツケが最悪のタイミングで襲いかかる。

フガラの障壁がヒノリムの
キルトの輝きまでもが失われた。

握力を失つた右手から握り締めていたはずのナイフが落ちる。

アウダーの異変に気付いたザングレイがニヤリと嗤つ。体勢を崩したアウダーの頭を左手で掴み上げ、そのままゅっくりと嬲る様に締め上げ始めた。

「グハハハハツ！ 何をしたかつたのかは知らんが…… 残念だつたなあ？ このまま潰れるか？」

「ああぐがあああツ！？」

弓を引くかそれともしているのか、必死に両手を動かすその姿が滑稽で。

そのザマで何が出来るものかと。その無駄な努力が憐れにも思え
ザングレイは我慢ならんと言わんばかりに 嘲笑していた。

一氣には潰さない。

ここまでコケにされた以上、ザングレイにはアウダーを楽に死な

せるつもつは無い。

「腕か、脚か、それとも腹か？ ビニでもいいぞ、じつくりと潰してやる」

そう言って口元を歪め、力を込めた右腕を振り上げようとしたザングレイであったが、

「ぬう？」

後ろへと引っ張られるような感覚に、何事かと自分の右腕へ視線を動かす。

「ぬう、ぐうおおおつ！！」

いつの間に現れたのか。

人間にしては大柄な男が、自分の右腕にしがみ付く様に抱き付き掌握していたのだ。

ゴメスである。

瓦礫の中で目を覚ました彼は、直後にこそ激しく混乱していたものの、ザングレイに掴み上げられたアウダーの姿を見て飛び出していた。

走る彼の視界に映るのは破壊された舞台、崩れた観客席。詳しい状況も過程も何も分らなかつたが、口クでもない事を目の前の化け物が起こしたであろう事だけは理解する。

「人間様を なめるんじゃねえぞ化物があああー！」

叫ぶ事で気合いを入れたゴメスは、ザングレイの右腕を両手で掴

んだまま口の身体を反転させる。

相手の右肘を支点として担ぎ上げ、巨木を引き抜くかのように投げ放つ。

「お、おおおおおー?」

ガクンと膝が落ちザングレイの体勢が崩れる。

勢いに押され、右肘が曲がるべきではない方向へと曲がろうとする。

どれだけ鎧が全身を覆っていたところで、関節までは包み込み保護する事は出来ない。

だが、ザングレイの巨体とその剛力は伊達では無かつた。

「ぐぬうううううー！」

投げられまいと、折られまいと力を込めた右腕は、逆にゴメスの巨体を持ち上げ返そうとしていた。

「な、何だとおー?」

常識ではありえない事態に、ゴメスの表情が驚愕と焦りに歪む。

「グハハハハッ、まだ生きのいいのが残っていたか!」

所詮人間、無駄な努力だと嘲りを込めて笑うザングレイ。

その時、ガキンと金具が外れたかのような音が、続けてガチャンと何か大きな金属が落ちたような音が響いた。

何だと、ザングレイが視線を向ければ“小手を外されてむき出し

となつた”己の左腕を掴むアウダーの姿。

その時、ザングレイはアウダーが笑つた様に見えた。

敵は魔法使い。無手の状態でも攻撃する手段はいくらもある。このままではマズイと、己の直感に従いアウダーの頭部を握り潰そうと意識を向ければ、今度は右腕に加えられた圧力が強まりそれを邪魔する。

「ええいっ、鬱陶しいぞお貴様らあああッ！」

アウダーとゴメス、どちらを先に潰すかと逡巡した事がザングレイの失敗であった。

轟、と音が聞こえた気がした。

ドンッと、ナニカが自分の身体を突き抜けた。

バラバラと舞い散る鎧の欠片。

喉元を駆け上がる不快感。

「……ゴフッ……」

ソレが己の血であると理解すると同時に、ザングレイの意識が急速に遠のいていく。

「……な、なにが……」

その問い合わせる者はいない。

薄れゆく意識の中、ゆっくりと倒れ込むザングレイの視界に、瓦礫の中からこちらに剣を突き付ける男の姿が見えた。

見得を切るような体勢から、ゆっくりと構えを解く男。

ヒュンケルであった。

「 ブラッディースクライド」

剣を持つ手をさながら『』を引き絞る様に構えて力を溜め、そこから急激に高速回転を加えた剣圧を、突きを放つヒュンケル必殺の剣技。

螺旋を描いて放たれたその一撃が、ザングレイの腹部を完全に貫いていた。

第7話 死神の哄笑

「……綱渡り人生……」

ザングレイの腕から解放されたアウダーは落としていたナイフを拾い上げると、じくじくと痛む頭を抑えながら視線を動かして状況を確認する。

「よつ、生きているかなゴメス君」

膝を折り、ぜえぜえと荒い息を吐いているゴメスに尋ねる。

「おう、生きてるよ。それにしても、最近酒場で姿を見ねえと思つ

たら何やつてやがんだよお前さんは

「色々だ、色々」

アウダーとゴメス、二人はルイーダの酒場での飲み仲間であった。二人に限らず、口モスで活動する冒険者連中は皆が飲み仲間とも言える。

互いの無事を確認し合つとアウダーは改めて周囲を見渡した。

舞台 ボロボロ。一日一日では直せそうもない。

観客席 ボロボロ。思ったほど残っている観客はない。上手く避難の誘導が進んでいるらしい。

貴賓席を見れば口モス王の姿がある。何やら色々と慌ただしく指示をしているようだが、こんな状況では仕方が無いのであろうと納得する。

「一」いやあ大事だな

「犠牲はあつたがあれ以上被害が広がらなかつただけでも上出来だと思つしかあるまい」

「そりゃあ……まあ、そうだろくな

背後からの声にアウダーが振り返り 思わず叫んだ。

「つて！？ 何やつてんだお前！？ 拭け！？ その真っ赤な顔を今すぐに拭けえええッ！？」

そこには瓦礫で額でも切つていたのか、顔面を真っ赤に血で染めたヒュンケルが何食わぬ顔で立っていた。

「ん？ ああ、問題ない。血が目に入ったせいで若干狙いが逸れた
気がするが、問題ない」

「……おこアウダー。今、コイツをちりととんでもない事を言わなかつたか？」

視線を向こうに逸らしながらポシリと軽くゴメス。

「問題ないわけあるかボケ！ 痛々しいんだよ痛いんだよ！ 見て
るこっちが痛いんだよ……」

「む？」

ベホイミと、慌てて駆け寄ったアウダーにより、大人しく回復呪文の治療を受けるヒュンケル。

額の傷だけでなく、服はボロボロになつており、彼の身体の至る所に裂傷や打撲の跡が見受けられた。

「化物^{アレ}が落ちてきた時に直撃でも食らつたのか？」

「すまねえ。俺を庇つたせいだな」

申し訳なさそうに言つゴメスの手には、どこからか拾つて来たのだろう。ヒュンケルの魔剣の鞘があつた。

気にするなど言つてそれを受け取るヒュンケル。

「それにしても、いつたいありやあ何だつたんだ？ オウアウダー
？」

「化物^{アレ}が落ちて来て観客席をぶつ飛ばして大暴れした。ムカついた

からぶちのめしに行つた。結果は「」覧の通り

アウダーが指示した場所には腹部に風穴を開けて倒れているザングレイ。

時折リピクトと痙攣をしていたが、今はもうその動きを止めている。

観客席を見つめながら、ゴメスの問いに答えるアウダー。

その視線の先には赤い色に濡れた観客席があった。

それを見つめたまま、背後に立つヒュンケルへと問いかける。

「なあヒュンケル。あの話の後にコレだろ？ タイミングがあんまりにもアレ過ぎてるんだけどよ？」

「オレも驚いてる。このような事はオレが知る計画には無かつた」「計画、ね」

ヒュンケルへと振り向いたアウダーの手には王家のナイフが握られていた。

その切つ先はヒュンケルの眉間に突き付けられている。

「な、何やつてんだアウダー……」

それを見て慌てたのはゴメス。

知人と恩人のただならぬ雰囲気に、何が何だか分らぬままに二人の間へと割つて入ろうとする。

しかし、その動きを制したのはヒュンケルであった。

「何なんだよ、何考えてんだよお前らー！」

「悪いなゴメス、ちょっと黙つてくれ。さて、ヒュンケル」

嘘偽りは許さない、そう問い合わせるアウダーの鋭い視線をヒュンケルは真っ向から受け止める。

「魔王軍の復活を告げ、魔王軍にいたと言い、魔王と戦うための仲間を探していると語った。そして今、計画と言つた。そんなことまで知っているお前さんは何者だ？ 助けてくれた事には感謝するが、怪しい事この上ないぜ」

「復活したハドラーは前大戦の失敗を踏まえて今回の地上侵攻には万全を期している。かつてとは比較にならない程に肥大した兵力を幾つかの軍団に分け、それぞれに軍団長を置き統率させる事で戦力を安定、増強させる。その一軍はそれだけで旧魔王軍に匹敵する戦力を備えている。侵攻は圧倒的な戦力を持つて全世界同時に行われる。各国が手を結び協力する間を与えないようにな」

ヒュンケルは一息つけて続けた。

「それを知っているのは、オレが赤子の頃から魔王軍の中でバルトスと言う名の騎士を父として育ち、そして勇者を父の仇として修業を積み、新生魔王軍の軍団長となつたからだ」

「……そんな奴がどうして魔王と戦おつなんて思つんだ？」

そのアウダーの問いかけに、それまで変わる事の無かつたヒュンケルの表情が歪んだ。

ギリツと歯を食いしばる音。

ヒュンケルは懐から何かの欠片らしき物と、小さな涙滴形の水晶

らしき物が付けられたネックレスを取り出すと、それを強く握り締めた。

「オレにとつての父はバルトスただ一人。人間であるか魔物であるかなどはどうでもいい。父の仇が勇者では無くハドラーであつた事を知つた以上、奴の好きにさせておく事など出来はしない！！」

ヒュンケルが始めて見せた激情。

その姿に思う事があつたのか、アウダーは手にしたナイフをヒュンケルから外して鞘に収めた。

「だから、オレは魔王軍を離反した。父のためにも、かつてオレを魔道の道から引き上げようとしてくれた師の名を汚さぬためにもオレは魔王軍と戦うと決めたのだ」

迷いなく告げるヒュンケルの瞳には確かな力があった。

それは、決して折れぬ鋼の意思。

その瞳を前にしたアウダーにはもう何も言えなかつた。

「……悪かったな」

「構わない。このような事態になるとは思つてもいなかつたからな。あの場で全て語つていればつまらぬ誤解を招く事もなかつた」

「そうだな、無駄に焦らしたお前が悪い」

「……一度、お前とは腹を割つて話し合つた方がいいのかもしかん

チヤキツと、今度はヒュンケルがアウダーの眉間に手にした剣の切つ先を突き付けた。

堪りずに両手を上げるアウダー。

「いや、冗談だから。『メンナサイ。全面的に俺が悪い』

緊張に満ちた雰囲気から一転し、碎けた雰囲気となつた事で緊張から解かれたゴメスがやれやれと大きく溜息を吐いていた。
安心して気が抜けたのか、途端に胃が痛くなつたゴメスは腹を抑えてその場に蹲つていた。

「なあ、といいでの牛はお前さんのお友達か？」

「いや、知らん。オレへの追手かとも思つたが……」

「モツシャモツシャ」

「百獸魔団を統べるだの魔王軍再興だと大騒ぎしてたぞ」

「……どう事だ？」

「モツチャモツチャ……クあああ～、苦ええ～、不味い！～」

「「」が知りてえよつて、ウルサイよゴメスー、もつちやもつちやと、匂ひついで食え！」

場内を慌ただしく動き回る兵士達眺めていた二人の背後では、
薬草をもしゃもしゃと口に含み続けるゴメスの姿があつた。

腹が痛いと騒ぎ始めた「メスにアウダーが渡した物である。

「ペッペッ、何だよ半分はお前らのせいなんだからな。アイテテテ。
んで、さつきから何の話だ？」

「あの魔物の事だ」

そう言いつつも、ヒュンケルの意識は既にザングレイの事からは離れていた。

いぶかしむ様に、観客席を見渡している。

「妙だな。気のせいかとも思つたが、先程より人が増えている」

「そりゃあ、こっちのけりはついたからな。安全になつたと分れば様子も気になるだろ？」

そう言いながら、アウダーも観客席を見渡した。

そこには、恐怖から解放されて安堵する人の姿が なかつた。
未だ恐怖に包まれた人達の姿がそこにあつた。

アウダーから見て奥、つまりは“闘技場の外から”何かに怯えた様子で観客達が戻つて来ていた。

どういう事だとアウダーが口を開きかけた時、数人のお付きの者とともにロモス王シナナが血相を変えてアウダー達の元に駆け込んで来る。

「た、大変じや！ 外に逃げた観客達までが襲われておる……」

その言葉が終わると同時に、ドンドンと、今までに何かが起きていると確信できる音が、外へと意識を向けたアウダー達の耳に聞こえた。

「外が本命か？」

「意図が分らん。だが、悠長にしている暇が無い事は確かだ」

そう言つて顔を見合した二人の元へ、駆け込んだシナナが頭を下げる。

「いけませんぞ王ー?」

「そ、そうです。貴方は」「

「黙れ!.. 今はそのような事などいりでもよいのだ! 賴む!」

諫める側近を一喝すると、シナナは一人の前に膝をつくとその頭をもう一度下げた。

シナナとて、一国の王が軽々しく頭を下げるなどあつてはならぬ事は当然承知している。

だが、それがなんだと言うのか。

この国の兵士だけでなく、パブニカの姫やその護衛の青年、出場していた選手達も戦つてくれていたが、逃げ遅れた観客達を庇いながらでは明らかに人手が足りていない。

「IJの國の民を救うのに手を貸して頂きたいー!..」

「ロモス王、頭を上げて下さい。オレはオレの意思で戦うだけ。貴方が責を感じる事など何も無いのです」

「……すまぬ……」

ヒュンケルの言葉に、頭を下げたまま答えるシナナ。

「その通りです。頭を上げて下さー」

そう言って、シナナを立ち上がりせよと手を伸ばしたアウダーの耳に　声が聞こえた。

『いやはやは全く、コレは運命だね』

「誰だー?」

ゾクリと、背筋を弄る不快感にアウダーは背後へと振り向いた。

そのアウダーの只ならぬ様子にヒュンケル達もその視線を動かす。

「な、何だありや?」

今日はワケの分らない事の大盤振る舞いだと、ゴメスが呟く。
見上げたその視線の先には、道化を思わせる黒い仮面に全身を黒
衣で包んだ何者かが悠然と宙に立っていた。

「ザングレイとやらの仲間か。見ない顔だが貴様も魔王軍か、道化

剣を構えると、油断なく相手を見据えるヒュンケル。

「ん~、少し違うねエ。道化だけだけじゃないんだ。クチの
悪い友達はボクの事を“死神”と呼ぶよ」

無造作に振られた右手には、背丈ほどはあるうがという大鎌が握

られていた。

それを指先で軽々と回転させて肩に担ぐ。日の光を反射して不気味に輝く巨大な刃。瞬く間に“道化”は“死神”と変化した。

「死神キル。ボクの名前サ」

そう言つてキルは大鎌を持ったまま、今後ともヨロシクと、まるで執事が主人を迎えるように眼下にいる者達に向けて恭しく一礼をして見せた。

その時、不意に感じた耳鳴りに眉をしかめたアウダーであつたが、頭を振つてナイフを構えるとキルに向かつて突き付ける

「……頭を下げたように見えてもその実、見下す自分と見上げる相手、か。慇懃無礼つて言葉を知つてるか？」

（あの時に感じた脱力感は今は無い。呪文を唱えるのに何の問題もない。魔法力は中級呪文であればまだ五、六発は持つ）

自分の状態を確認しつつ、横目でヒュンケルを見れば、アウダーの意図を察したのか「問題無い」と呟きを返す。

「オヤ。なんだ、気付いてたんだ馬鹿にしてる事に。ウフフフツ。ソレが分るキミも大概イイ性格をしてるみたいだねエ、アウダー君」

「……そりやビツモ。よく言われるよ」

軽口で返しながらも、キルを見ているだけで苛立ちや不快感が込み上げて来る事に、アウダーは戸惑いを感じていた。

「初対面、だよな？　名乗つた覚えはないんだけど？」

拭い切れない違和感が膨れ上がるが、今は考える時ではないと自分に言い聞かせる。

「ゴメス、王様達を連れてここから離れろ」

しかし、巻き込まれるぞと続けたアウダーの言葉に答えたのはゴメスではなくヒュンケルであった。

「いや、もう無理だ」

「何？」

言われてアウダーが振り向けば、そこには倒れ伏すゴメスの姿。ゴメスだけではない。シナナもロモスの兵士達もであった。

「彼らだけではない。客席の者達もだ。どうやら、この場に立っているのはオレとお前だけらしい」

「まさか！？」

あの音かと、ハツとして死神を見るアウダー。

クルクルと大鎌を回転させながら、待つてましたとキルが答えた。

「アタリだよ。まだ実験中だつたんだけど折角だからね、試してみたのさ。トヘロスって知ってるかい？一定範囲内にいる全てのモノの精神に作用し戦意を削ぐ呪文や。ソレの強化版と思ってくれればいい」

身振り手振りを交えて大げさに語るキルの姿はあまりにもぎこちない
みて、それが一層アウダーの苛立ちを加速させる。

「……殺したのか？」

「イヤ、眠つて貰つているだけサ。死神は意外と慈悲深いんだよ。
無闇矢鱈に殺しはしない。相手を決めて確實にスマートに殺すのサ」

「もういい。お前は黙れ」

キルが地面へと降り立つたと同時にアウダーとヒュンケルが仕掛けた。

アウダーは我慢の限界、ヒュンケルはキルが降り立つ直後の隙を
狙つたものであつたが、幸運にもそのタイミングが一致していた。
左側面からアウダーが頭部を、ヒュンケルは右側面に周り胴体を。
囮らずも互いに挟み込むようにして斬り付ける。

「チツ」

「速い」

しかし、その挾撃をキルはまるで風に揺られる柳の様にひらりひ
らりと器用に避けて見せた。

「下がれヒュンケル！」

追撃しようとしていたヒュンケルを抑え、ならばとアウダーが放
つたのは真空の刃で敵を斬り裂くバギの呪文。

「避けて見せろよー バギマーー！」

上下左右、四方から襲いかかる風の刃を前にして、キルに慌てた様子は無い。

「ハハツ、体勢を崩したところに範囲系魔法とは」

手にした大鎌を一閃。それだけで、キルに向かっていた真空の刃は全て焼き消された。

「エグイ選択だけどバギマジヤダメだね。それじゃあボクには届かない」

「チツ、冗談きついぜ。今日は化物祭りかよ」

軽口を叩きながら横目でヒュンケルを見れば、瞳に宿る闘志の炎、その衰えは些かも感じられないのは頼もしい。
さあどうするかと、アウダーが次の手を思案しようとすると、それを遮るかのようにキルが指を鳴らした。

「何だ？」

何をと、アウダーとヒュンケルが見つめる中でキルの影から一つ目の小悪魔が姿を現した。

場違いなまでに明るい声が響く。

「ハイハイ。呼んだ？ ねえ呼んだのキル？」

「キミタチに紹介しよう。この子はピロロ、ボクの大切な相棒サ」

「ヨロシク、ヨロシク。でもスグにサヨナラだけねー。キャハツ、キャハハハハツ」

そう言つてはしゃぐピロロの姿はまるで子供である。
無知から来る子供の残虐性をむき出しにした存在。それがアウダ
ーの抱いた印象であった。

(アウダー、ここはオレに任せとお前は外へ向かえ)

(お前一人で相手する気か?)

(優先順位を履き違えるな。今、助けが必要なのはどこなのか分つ
ているだろう)

(……分つたよ。気を付けよ、どうにも嫌な感じがする)

眠つているだけという言葉を鵜呑みにする事は出来なかつたが、
あの時のシナナの様子から外の状況が切迫している事は疑つまでも
無かつた。

ヒュンケル一人だけで大丈夫かとも思つたが、ここで一人揃つて
足止めになるよりはマシかと、アウダーはヒュンケルの言葉に従う
事にした。

「行けアウダー！」

その言葉を合図に駆け出したアウダーであつたが、僅か数歩でそ
の足を止める事になる。

「チツチツチツ、それは困るなア」

「なー?」

アウダーの驚愕の声にヒュンケルが振り向けば、その行く手を遮るかの様に立つキルの姿。

(馬鹿な、奴は田の前に)

ヒュンケルが振り返れば、そこには崩れ落ちた人形と嬉しそうにはしゃぐピロロの姿。

「キャハハツ、人形劇でーす。面白かった? 驚いた?」

「ボクは道化だからねエ。お客様は楽しませないと」

元々笑みの表情をかたどっていたキルの仮面であったが、アウダーにはそれが一層深く笑ったように見えた。

「おつと、忘れるところだつたよ。頼まれていたお仕事を済ませないとねエ。ピロロこれを」

そう言つて懐から取り出した赤く輝く珠を、キルはピロロへと投げ渡した。

「了~解。おつじーと、おつじーと~」

それを受け取ったピロロは鼻歌交じりでザングレイの元へと向かう。

それを横目で見ながら、キルはヒュンケルへと語りかける。

「さてと、それじゃあ不死騎団長殿、いや元か。キミは早く外の人

間達を助けに行つてやりたまえ。ブレーガン君はまだしも彼女はやり過ぎるきらいがあるからねエ」

その意外な申し出にヒュンケルの警戒が増す。

「どういづつもりだ？ 表にいるのは貴様の仲間ではないのか

「別に。外の彼らがどうなろうとボクの知った事ではないよ。彼らを手伝えとは命じられていないからねエ。ボクに命じられたのは届け物だけさ。後はアウダー君がらみの私用サ」

「ならば、オレも答へよつ。貴様の都合など知つた事ではない。この場で討つ」

そう宣言すると、ヒュンケルは手にした剣を鞘へと収め、それを正眼に構えた。

ヒュンケルの持つ魔剣、その力を解放するために。しかし

「おつと、キミの魔剣の話は聞いてるよ。余計な事は止めたまえ

そんな事をすればここで眠る人間達は一度と目を覚まさないかもね、その言葉でヒュンケルは動きを止めていた。

「丁度いい。向こうが行けつて言つてくれてるんだ。お言葉に甘えとけよヒュンケル」

「アウダー！？」

「理由は分らないが、俺を御指名だ。それに俺もコイツに聞きたい事が出来たしな」

結構時間が経っている、急いでくれ。
そうアウダーに呴かれ、一瞬どうすべきかと逡巡したヒュンケルであつたが、

「……勝算は?..」

「有るよつな無いよつな」

「……最悪、戻るまで時間を稼げばいい。無理はするな」

「お前つて意外と過保護なのな。ま、気にすんな。表の連中を頼むわ」

「分つた」

短く頷くと、ヒュンケルは外へ向かい駆け出して行く。

言葉通り、その姿が見えなくなるまでキルが動く事は無かつた。
先程の件もあって、不意打ちもあるかと警戒していたアウダーであつたが、結果的に嘘は言つていなかつたなど、その注意をキルへと向ける。

「で? 確かに俺はお前とは初対面のはずだ」

「だろうね。でもね、ボクはキミの事を知っていたよ。十年ほど昔になるかな、見かけたんだよ アルキードでね」

「テメエツー?」

何を知っている、そつと詰め寄るアウダーとキルの間を滑り込むよつこして現れるピロロ。

「あつちは終わつたよキル。褒めて褒めて」

「ウフフッ、いい子だねピロロは」

無邪気にはしゃぐロロの頭を左手で撫でながら。

アウダーの一撃を右手に持った大鎌で易々と受け止めるキル。

「何を知っている？　あの場所で何があつたのかを知っているのか！？」

押しこむように力を込め、射抜くように睨み付けるアウダーの視線を受けてもキルは動じない。

「フフツ、怖い顔だ」

むしろ、そのアウダーの苛立つた様子を楽しんでいたよつこさえ見える。

「こんなお伽噺を知っているかい？　古来より伝説の竜の血を飲んだ者は不死身の力を得る、ってやつさ。不死身は言い過ぎだとは思うけど、どうやらそれに近い事は起こつていたようだね」

「……何の話だ」

「それはねエ」

アウダーの眼前に、身を乗り出したキルの仮面が迫る。そのままアウダーの耳元へと顔を近づけてキルが呟いた。

「 ヒミツだよ

直後、アウダーの持つナイフが横薙ぎに振るわれた。その一閃を飛び退く事で回避したキルは、ピロロを伴って再び宙へと浮かび上がる。

「野郎ツ！…」

逃がすかと、アウダーが跳躍しようとした時に異変は起こった。

「グウルオオオオオオ！」

突如、息絶えていたはずのザングレイが咆哮を上げた。未だ倒れたままの身体は激しい痙攣を起こし、全身から赤黒い何かを立ち昇らせていく。

「馬鹿な、あの傷で生きていたのか？」

アウダーが見つめる先では、ゆっくりとした動作でザングレイが起き上がるこうとしていた。

風穴を開けられたザングレイの腹部が、まるでそこだけ時間が巻き戻されているかのように再生していく。

全身の痙攣が激しくなり、それと共にギチギチと何かが軋む音が響く。

「ぐぎやあああがががあああああツ！…」

ザングレイが絶叫し、その身を覆っていた鎧が内側から弾け飛んだ。

そうして立ちあがつたその姿は、肥大化した筋肉のせいかアウダーの目には一回りほど大きくなつたように映つていた。

「まさか、死者……蘇生……なのか？　いや、違う」

皿田をむき、口は半開きで血と涎を垂らしたままのその姿には知性も理性も感じる事は出来ない。

「ふむ、一先ず身体強化は成功か。研究中と言つてはいたが、中々やるねエ妖魔学士君も」

「死靈術か！！　死者の肉体を弄ぶ禁呪であり外道の法ツ」

「概ね正解。さて、それじゃあここからはボクの要件を済まそつか。アウダー君これが何か分るかい？」

「そう言つてキルが懐から取り出したのは、奇妙な形をしたアクセサリーの様な物だつた。

「竜の牙ドラゴン・ファンという物でね。十年ほど前にある場所で手に入れた物サ。受け取りたまえ」

誰が、と無視しようとしたアウダーであつたが、気が付けばキルから投げ付けられたそれをしつかりと握り締めていた。

「ちょっとしたお守りだよ。未熟なキミへのサービスだ」

初めて見た物のはずであるのに、自分はこれを知つてゐる。その

奇妙な既視感に戸惑いを隠せないアウダー。

しかし、その事を悠長に考えている余裕はなかつた。

「「」「ゴゾ、ウ……！」や……！」ううう、小僧がアアアアアツ……」

それは怨念であったのか。

瞳はあらぬ方向を向き、どこを見ていいるのかさえ定かではないのに、ザングレイは真つ直ぐにアウダー目掛けて突進してくる。

「さあ、この場にはキミを助けてくれる者はもういない。死にたくないればキミだけの力で切り抜けるしかない。ボクの期待を裏切らないでよ？」

そう言い残すと、キルはピロロと共にこの場から姿を消していた。

「チッ、なんだってんだあの野郎！ ワケが分らん……」

舌打ちを一つ。そしてアウダーは正面を見据えた。
ザングレイがその牙をむき出し、爪を光らせ、足下を踏み砕き、
地響きを立てて迫り来る。

「しつこいんだよッ……」

力は増しているようだが、それに対してもスピードが落ちている。
回避しようとしたアウダーであったが、背後で眠るロモス王やゴ
メス達の姿に踏み止まつた。このままでは彼らが助からない、と。
小細工を弄したところで無意味、ならばどうするか。

正面から迎え撃つ。

何を、どうやって、そんな事は疑問にも思わなかつた。

そこにいるのが当然の様に竜の牙を左耳に装着し、 ただ身体の動くままに任せた。

「ライティング」

それは雷を操る神秘の呪文。

呼びかけに答えるように、稻妻が走る。

いだ。
雷鳴が鳴り響き、
アウダーの掲げたナイフに向かつて雷が降り注

刀身に荒れ狂う雷の力が集まる。

アウダーの脳裏に浮かぶイメージに比べてはるかに劣るモノであったが、この技の本来の使い手ではないアウダーでは荷が勝つた。抑えきれない力が余波となつてアウダーの身体にもダメージを与える。

意譯が飛びかける

無理だと思つた。

自分が行おうとしている行為
ある、と。
魔法剣。馬鹿馬鹿しいにも程が

暴走するサングレイが目前に迫る。こうなつては躊躇し、逡巡している暇はない。

「んなくわおおおおおお...」

歪で不安定ながらもどうにか形となつた雷の刃を手に、アウダーもまたザングレイ田掛けて突進する。

互いの間合いが触れ合ったその瞬間、ありつたけの力を込めてアウダーは剣を振り下ろした。

閃光が周囲を埋め尽くし轟音が鳴り響く。

打ち碎かれた地面が撒き上がり砂塵が吹き荒れる。

それは上空から成り行きを見守っていたキル達の元にも届くほどであった。

「ペツペツ、ひつどいなあ。身体中が埃まみれだ」

「本家のモノに比べれば威力も精度もとても見れた物じや無いケド、間違いないね。あれは ギガブレイク」

比喩では無く。キルの笑みを浮かべた道化の仮面、その口元が歪む。

震える身体を押さえつけ、しかし堪らずに笑いの声を上げた。

「クツ、ククツ、アハハハハハハハツ！！ いやはや、ここまでとはネ。さすが想定外だったよ。やつてくれたねエ バラン君は」

哄笑から一転、キルは黙したままじっと眼下を見つめる。

見下ろすキルの視線の先では、砂塵が薄れ始めて鉢状に抉られた舞台のなれの果てが姿を現した。

その中心に立つ二つの影。

剣を振り下ろした体勢のまま動かないアウダーと、全身から黒煙を立ち昇らせるザングレイ。

風が吹いた。

ピシリと、アウダーの手にしたナイフに亀裂が奔り、風に吹かれ
るままに崩れ去る。

そして、ザングレイの巨体もまたゆっくりとその場に崩れ落ち
た。

「キミが残した力はボクが有効に使ってあげるよ。あの世とやらで
精々己の業を悔やむといいさ。ウフ、ウフフフフシ、アハハハハハ
ハハハハハツ！！」

衝撃と轟音の為か、はたまた術の効力が切れたのか。

意識を取り戻し始めた人々が、目の前の光景に驚きの声を上げ始
めていた。

その騒ぎを、どこか遠いところの出来事のようにぼんやりと捉え
ていたアウダーであつたが、まだ終わってはいないと萎えかけてい
た氣力を振り絞り空を見上げた。

(……いない？ 見逃したのか？)

キルの姿が見えない事で、アウダーの張り詰めていた最後の糸が
切れた。

言葉通り、糸の切れた人形のよう、その場へと一気に崩れ落ち
る。

「おつと、オイしつかりしろアウダー！！」

その身体を、慌てて駆け付けたゴメスが抱き止めていた。

「オ、オイコラ！ 勝手に死ぬんじゃねえぞーー！」

「」

「あ、何？ 空だと？ 空って、何にもありゃしねえよ」

(……見逃された……のか？)

漠然とアウダーはそんな事を考える。

(……取り敢えず……終わりだ……後は、もつ……)

痛みを感じていない事が不思議だったが、それはそれでいい事だと考える。痛いのは嫌だ。

視界の隅でゴメスが何か言つてゐるようだが、大げさな、と思つ。急速に意識が混濁をし始める。

今、自分が上に向いているのか下に向いているのか、寝ているのか立つてしているのか。

今何を考えていたのか、何をしようとしていたのか。

(……眠い)

その思考を最後に、アウダーの意識が途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8664y/>

ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

2011年11月27日14時47分発行